

# ピストルの使い方

——（前題——楊弓）

泉鏡花

青空文庫



はじめ、私はこの一篇を、山媛やまひめ、また山姫、いずれかにしようと思つた。あえて奇を好む次第ではない。また強いて怪談がるつもりでもない。

けれども、現代——たとい地方とはいつても立派な町から、大川を一つ隔てた、近山ながら——時は晩秋、いやもう冬である。

薄いのも、半ば染めたのも散り済まして、松山の松のみ翠みどり深く、丘は霜のように白い、尾花が銀色を輝かして、処々に朱葉もみじの紅くれなゐの影を映している。高嶺たかねは遙はるかに雪を被かいで、連山の波の寂然と静まつた中へ、島田鬘しまだに、薄すすきか、白菊か、ひらひらと簪かんざしをさした振袖の女が丈立ちよくすらりと頭あわられた、と言うと、読者は直ちに化け

しょう  
生のものと想わるるに相違ない。

——風俗は移った。

天衣、瓔ようらく珞のおん装よそおいでなくても、かかる場面へ、だしぬけの振袖は、狐の花嫁よりも、人界に遠いもののごとく、一層人を驚かす。

従つて——郡多津吉も、これに不意を打たれたのだと、さぞ一驚きつを吃したであらうと思う。

しかるに振袖の娘は、山姫どころか、（今は何と云うか確たしかでない）……さ、さ、法界……あの女である。当いまどき時は、安来節、おはら節などを唄うと聞く、流しの法界屋の姉ねえさんの仮装したのに過ぎない。——山人の研究を別として、ただ伝説と幻象による微

妙なる山姫に對して、濫みだりなる題名を遠慮した所以ゆえんである。

それから——暑い時分だから、冷いことも悪くない。——南天なんてん燭てんの紅あかい実を目に入れた円い白雪は、お定りその南天燭の葉を耳みみに立てると、仔細しさいなく兎うさぎである。雪の日の愛々しい戯れには限らない。あまねく世に知られて、木彫、練ねりもの、おもちゃにまで出ている。

玉子形なりの色の白い……このもの語がたりの土地では鶴つる子のこ饅頭まんじゅうと云うそうである、ほつとり、くるりと、そのやや細い方を頭かしらに、緋ひのもみじを一葉ひとは挿して、それが紅い鳥冠とさかと見えるであろうか？

気の迷いにもせよ、確たしかにそう見えた、と多津吉は言うのである。

——聞きがきする私のために、偏ひとえにこれは御承認を願いたい。

山の上の墓地にして、まばらな松がおのずから、墓所はかしよ々々の劃しきりになる。……一個所、小高い丘の下に、蓑みので伏せて、蓑の乱れたような、草の蓬おどろに包んだ、塚ともいおう。塔婆、石碑の影もない、墓の根に、ただ丘に添って、一樹の記念しるしの松が、霧を含んで立っている。

笠形かさなりの枝の蔭に、鳥冠が、ちらちらと草がくれに、紅い。……華奢きやしやな女の掌てのひらにも入りそうな鶏が二羽、……その白い饅頭ふたつが、向い合いもせず、前向に揃うともなしに、横に二個ふたつ、ひつたりと翼を並べたように置いてある。水晶に紅べにをさした鴛鴦おしどりの姿にも擬なぞえられよう。……

墓へ入口の、やや同じたけの松の根に、ちよつと蟠わだかまつて高いか

ら——腰を掛けても足が伸びるのに、背かがみになった膝ひざに両手を置いて、多津吉は凝じつと視みていた。

ステツキ  
洋杖は根に倒れて、枝にも掛けず、黒の中折帽なかおれぼうは仰向けあおもむに転がっている。

ここからでも分るが、その白い饅頭は、草の葉にもたせて、下に、真四角な盆のように、こぼれ松葉の青々としたのが、整然として手で梳すいたように敷いてあった。

俗よに言伝える。天狗てんぐ、狗竇くひんが棲すむ、巨樹、大木は、その幹またの肢あしの交叉こうさの一所ひとところ、氈せんを伸べ、床を磨いたごとく、清く滑かである。——禁を犯して採伐するものの、綱を伝って樹を上りつつ、一目見るや倒さかさまに墜落するのが約束らしい。

きれいな、敷松葉は、その塚の、五寸の魔所、七寸の鬼の領とも憚はばからるる。

また、あまた天狗が棲すむと伝える処であつた。

緋ひの烏冠の小さな鶏は二羽白い。

多津吉は一度、近々と視みて、ここへ退いたまま、怪あやしみながら、瞻みまもりながら、左さう右なく手をつけかねているのである。

颯さつ——と頸うなじから、爪さきまで、膚はだを徹とおして、冷ひやく、静しずかに、この梢こすえをあれへ通う、梢と梢で笏こだまを打つて、耳近に、しかも幽かすかに松風が渡つて響く、氷の糸のような調律しうりふである。

そこへ——振袖の女が、上の丘へ、帯から上、胸を半身でくつきりと美しく出た。山では、ちつとでも高い処が、遠いように見



え、また思いのほか近く見える。霧も薄し、こちらからは吃驚するほど、大きく見た、が、澄切った藍色あいいろの空を遥はるかに來たように、その胸から上半分の娘の方は、さも深そうに下の墓を覗のぞいて、帽子を転がして、ぼんやりうつむいている多津吉を打撞ぶつかったように見ると、眉はきりりとしたが優しい目を、驚いた様さまに睜みはりながら、後退あとじきりになつて隠れたが。

しばらくすると、そつと、うしろから、わざと足数を拾つて、半ば輪を描いて近ちかづいた。上からすぐ男の居る処へ道はあるが、その阪下りに來たのではない。丘の向う裏から廻つて、開いた平場ひらばを寄つたのである。

「旦那。……」

旦那と、……肩越に低く呼んだが、二声とも呼ばせず、男は直ぐに振向いた。女の近寄るのを、まんざら知らないのではなかつたらしい。

だから、女も、ものが言いよかつたろう、もう、莞爾にっこりして、「何をしていらつしやるの。」

下品な唄を、高調子で繰返す稼ぎのせいか、またうまれつきの声調のどか、幅があつて、そして掠かすれた声が、気さくな中に、寂しさが含まれる、あわれも、情も籠こもつて聞こえた。

此方こなたも古塚の奇異に対して、瞑想めいそう黙思した男には相応そぐわない。

「実は——お前さんを待つていたよ。」

成程、中折帽を転がしている人間らしい。これなら何も、霧で

ぼかし、丘で隔て、間に松の樹をあしらつてまで、骨を折つて二人を紹介するがものはなかつた。

けれども、もう一度、繰返すが、町近くで、さまで高くないこの山、多くの天狗の集り住むと、是沙汰これざたする場所である。雲の形、日の隈くまなど、よりよりに、寂しい影が颯さつとさすと、山遊びの人々も、川だちの危あぶない淵ふちを避けるようにして場所をかえるので……ちようどこの辺がいまその深い淵であつた。

赤土の広場の松の、あちこちには、人のぶらつくのも見え、谷に臨んで、莫ご塵ご毛もう氈せんを敷いた一組、二組も、色紙形に遠く視ながめられる。一葉ひとは、二葉ふたは、紅くれの葉も散るが、それに乗つたのは鶏ではない。

それに、真上にもあるような、やや、大小を交えて、たとえば、こるい古墨の砲台のあととも思われる、峰を切崩して、四角に台を残した、おなじ丘が幾つもある。上が兀はげて、土がきれいで、よく見ると、あつち誂えた祭壇の……そこへ天狗が集りそうで、うそ寂しい。

——実はその幾つかを、あるいは縫い、あるいは繞めぐつて、山道を来る途中で、もうちつと前に、多津吉は、この振袖に逢あつたのである。

町から上るには、大手搦からめて手といったように、山の両方から二口ある。——もつともこうした山だから、草を分け、茨いばらを払えば、大抵どの谷戸やとからも攀よじることが出来る……その山やまふところ懐かきわを搔分

けて、茸狩きのこがりをして遊ぶ。但しそれには時節がやや遅い。従つて、人出もさまではなかつた。

多津吉は、町の場合——件くだんの搦手の方から、前刻尾づたいに上つて来た。

竜胆りんどうが一二輪。

小笹の葉がくれに、茨の実の、紅玉を拾わんとして、瑠璃るほそおいに装まを凝らした星の貴女が、日中を天降あまくだつたように。——

「ああ、竜胆が咲いている。」

「まあ、ここにも。」

——更あらためて言うが、その時は女まじりに、三人ばかり土地の知ちかづき己かづきで、多津吉に連つれがあつた。

その女のつれが、摘んで、渡すのを、自分の見つけたのと二ふたも本とみもと三本、嬉しそうに手にした時……いや、まだ、その、一本ひとつもと、二本、三本を算かぞえない時であった。

丘の周囲まわりを、振袖の一行——稚児鬘ちごまげに、友染ゆうぜんの袖、緋ひの襷たすきして、鉄扇まが擬がいの塗骨おうぎの扇子を提げて、義経袴よしつねばかまを穿はいた十四五の娘と、またおなじ年紀としごろ……一つ二つは下か、若衆鬘わかしゅまげに、笹色の口紅つけて、萌黄もえぎの紋つきに、紅あかい股引ももひきで尻端折しりはしよりをしたのと、もう一人、……肥ふとった大柄な色白の年増で、茶と白の大市松の搔卷かいまきのごとき衣装で、青い蹴出しけだを前はだけに、帯を細く貝の口に結んだのが居た。日中ひなかといえども、不意に山道で出会ったら、これにこそは驚こう。

かかる異様なのが、一個々々、多津吉等の一行と同じ影を這はせて歩ある行るいた。

彼かしこ処こに、尾花が十穂とほばかり、例のおなじような兀はげた丘の腹はらに、  
 小おくさ草さもないのに、すつきりと一輪咲いて、丈も高く蒼つほみさえある：  
 …その竜胆を、島田鬻しなのその振袖、縹しゅちん珍の帯を矢の字にしたの  
 が、弱腰を嫻しなやかに、白い指をそらして折つて取つた。

…狩を先んじられた気がちよつとした。

その多津吉の傍かたわらへ、何の介意もなく、するすると、棲つまをちらりと捌さばいて寄ると、手を触れるばかりにして、竜胆の紫を黙もくつてよこした。流れた瞳すずの清しき。

「ありがとう。これはどうも。」

とばかり多津吉は、そのまま連つれに連れられようとして、ふと見ると、一方は丘を、一方は谷の、がけ際の山笹を、ひしやげた茶かまそこぼうしの釜底帽子が、がさがさと、乾からびた音を立てて揺ゆすつて、見上みあげじ皺わを額おのこに刻んで、もじやもじや眉まゆに、きよろりと目を光らした年配おのこの漢が見えた。異様な一行つれの連らしい。

娘と手を合わせたのに、何となく気がさして、多津吉はその漢おのこに声を掛けた。

「茸きのこはありますか。」

「はあ、いや松露まつたけでな。」

もつてのほか、穩おだやか和な声した親仁おやしは、笹葉ささばにかくれて、崖がけへ半しばがば踞しゃがんだが、黒の石持こくもちの羽織うゑに、びらしやら袴ばかまで、つり革がの



頑丈に太い、提革鞆さげかばんを斜はすにかけて、柄のない錆小刀さびこがたなで、松の根を搔廻かきまわしていた。

「……松露がありますか、こんな処に。……」

「ありますかつて、貴方あなた、ほれ、これですが。」

ころ、ころ。

「ほれ、——諸国、旅をして存じております。砂浜から、ひよつこりひよつこりと出る芋づるの奴より、この……山の松露が、それこそ真まに香かうばしい露の凝ったので、いわば松の樹しゆの精しょう根こんでがしてな。」

「松露を掘ってるようじゃ、法界屋、景気が悪うございますね。」

男のつれは笑つたが、

「あなた幾いく千金かお遣んなすつたの、御祝儀を。」

と女のつれが云つたのに、多津吉はついうっかりでいたのを心着いた。——竜胆を手折ってくれたその振袖は、すらすらと裳もすそに薄すすきを掛けた後姿が見えて、市松大柄な年増は、半身を根笹に、崖へ下りかかる……見附かつた山の幸に興じたものであろう。秋の山は静しずかに、その人たちの袖摺そでずれに、草のさらさらと鳴るのが聞こえて、釜底帽子の親仁も、若い娘たちも、もう山懐に深かつた。

「そこらをぶらつくうちにはまた出会いましたよ。あの扮装なりです……見違えはしませんから、わざわざ引返すのも変ですから。……」

だのに、それから、十歩、二十歩とはまだ隔らないうちに、目の下の城下に火が起つた——こういうと記録じみる——一眸の  
 下に瞰下ろさるる、縦横に樹林で劃られた市街の一箇処が、あたかも魔の手のあつて、森の一束を蒼空へ引上げたような煙が濛々  
 と揚つて、流るる藍色の川を切つて暗くした。

——町の東と西とに分れて、城の櫓と、巨剎の棟が見える。  
 俗に魔の火と称えて、この山に棲む天狗が、遊山を驚かすために、  
 ともすると影のない炎を揚げて、渠等の慌て騒ぐのを可笑がる：  
 …その寺の棟に寄つた時は真の火である。城に近いのは空き煙だ、  
 と言伝える。

ちようど真中であつた。森の碎けて、根の土を振うがごとく

乱るる煙は。——

見当が、我が住む町内に外れても、土地の人には随所に親類も知己も多い。多津吉の同伴はこの岨路を、みはらしの広場下りに駆出した。

口早に、あらかじめ契つた晩飯の場所と、火事は我が家、我が家には直面しない事と、久しぶりなる故郷の山に、心静に一人親むこととを言置いたのは言うまでもない。

駆出した中の婦が、広場の松を低く、ハタと留まつて、前後左右を、男女のばらばらと散る間に、この峰の方を振返つた。肩を絞つて、胸を外らすと、遙に打仰いだ顔はやや蒼く、银杏返しの鬢が引戦いで見える。左の腕に多津吉の外套を掛けていた。

意味は知れよう。

「構わない、構わない、打棄うっちゃつて——そこへ打棄うっちゃつて——」

多津吉は上から手を振った。自おのずから竜胆りんどうの花は高く揺れた。

声は届かない。念は通じた。が、言ことは伝つたらないから、婦おんなは外套おんなを預あずかつたまま、向直むかひつて衝つと去いつた。

多津吉は一人、塚を前にして、松蔭に居たのである。

「私も貴方に逢いに来たの。」

「嘘うそを吐つけ。」

「あら、ほんとだわ。」

帽子をよけて、幹に立った、振袖は肩ずれに、島田しまだ鬚ひげは男より

やや高い。

「連つれの人は？」

「松露を捜して、谷の中へ分れて下りたの。……私はお精進の女で、殺生には向かないんですって。……魚でも、茸きのこでも、いきもの……」

と言いかけて、ちよつと背きながら、お転婆に笑った。

「あら、可いや厭だ。——知らないわ。」

「何をさ。」

「いいえ、いきものをね、分つて？……取るのは、うまれつき拙へたなんですって。ですから松露を捜す気もなかった処へ、火事だつて騒ぎでしょう。煙が見えたわ。あの丘へ駆上ると、もう、その

煙は私の立った背より低くなって、火も見えないで消えたんですもの。小火ぼやなんですね。」

「いや、悪戯いたずらだよ。」

「まあ、放火つけび。」

「違うよ。……魔の火と云ってね、この山の天狗が、人を驚かす悪戯だそうだ。」

「そう、面白いわね。」

諸国を渡る門かどづけの振袖は、あえて天狗に怯おびえない。

「じゃあ、今しがた、ここに居た、あの、天狗様の悪戯かも知れないわね。」

「ここに居た、天狗、どこに、いつ。」

かえつて多津吉が驚いた。

「そこにさ。貴方の。」

「ええ。」

「腰を掛けていらつしやる、松の根を枕にして。」

多津吉は思わず居退いた。うっかりそこへ触った手を、膝へ正したほどもである。

「仰向けあおむに寝転んで、蒼空あおぞらを見ていたんですよ。」

言うまもなしに、

「御覧なさい。」

背後うしろから、塚へするすると、乱菊の裾を、撓たわわに、紫の色に出

て、



「まだ、整ちやんとしていきますのね。この白い鶏も、その天狗様の悪戯  
じやありませんか。——ああ、竜胆りゅうたんを。」

と、ながしめ清すずしく、

「まあ、嬉しい。あなたもお手向けなすったのね。あの、そして  
この塚のいわれを御存じなんですか。」

翳かげせる袖と竜胆の紫の影は添いながら、鳥冠とさかは冴くれないえて紅である。

「いわれも聞きたし、更あらためて花の礼も言いたいが、——何だか、  
お前さんは、魔神の眷属けんぞく……と言つて悪ければ、娘か、腰元、  
でももあるような気がする。」

多津吉は軽く会釈して、

「その鶏は？」

「ええ、まったくよ。」

とまた莞爾にっこりしながら、翳かぎした袖を胸に返して、袂たもとの先を軽くなぶつた。

「天狗様が拵こしらえて、供えたんですがね。よく、鳥が啣くわえて行かなかつたこと。——そこいらの墓では、まだ火の点ともれた、蠟燭ろうそくを、真ま黒くろな嘴くちで啣くわえて風のように飛ぶと、途中で、青い煙になつて消えたんなんですのに。」

「鳥にしてみれば——鳥にしてみれば、は可訝おかしいけれども。」

身を起して、寄ると、塚を前にほとんど肩の並んだ振袖は、横へ胸を開いて、隣地との土の低い劃しきりへ、無雑作に腰を掛けた。こぼれ松葉は苦とまのように積つて、同じ松蔭に風の瀬が通つた。

「燃えさしの蝋燭より、緋の烏冠の鶏とりは、ちよつと扱といにくいかも知れない。——嘘うそのようだけれど、まったく真まに迫おそっている。

姉さん、ほんとうの事を聞かしてくれないかね。この鶴の子饅頭は。」

「あら、ほんとうですつてば。」

片手を松葉に、

「だって、自分でそう云つたんですもの。……（俺おれは天狗だぞ。）

ツて。……先刻さつき、落おつこちてるお客をひろいに——御免なさい、貴

方もお客様ですわね——私たち、離れ離れに、あつちこつち、ぶらつきますうちに、のん気らしく、ここに寝転ねころんでる人がありますから、こつちから……脚の方から入りましてね、いま、貴方が

掛けておいでなすつたその松の坊主頭——坊主じゃないんですけれど、薄毛がもやもやとして、べろ兀はげのおおき大きい円ひしやいの……挫ひしやげたつて惜おしくはないわ、薄黒むぎわらぼうしくなった麦稈帽子むぎわらぼうしを枕まくらにして、黒い洋服ふくでさ。」

「妙な天狗てんぐだね。」

「お聞きなさいよ。何とかウイスキーウイスキーでんでしよう。壘びんをさ、——余あまり清潔きれいじゃあない手ハンケチ巾ハンケチに載のせたまんまで、……仰あおむ向むいてその鼻はなが、鼻はなが、ほほほ。」

「鼻はなが。」

多津吉たつきちは真ま面目まじめで聞きく。

「隆たかくない、ほほほ、ちよつと撮つまんでやろうかしら、なんと思おもつ

て上から顔を視ると、睡つていたんじやないんです。円くて洗しぶつら  
 面の親仁様おとつさんが、団栗目どんぐりめをぎろぎろと遣つて、（狐か——俺  
 は天狗だぞ、可恐こわいぞ。）と云うから、（可恐いもんですか。）  
 つてそう云うと、（成程、化もの夥間なかまだ、わはは。）大な声おおきなの。  
 老人としよりの癖に、カラカラしたものよ。どっこいしよなら親仁おやし相応  
 なのに、（やあ、）と学生さんのような若い掛声かこゑで、むくりと起  
 きた処ところが、脊せきの低い、はち切れそうな緊しまつた身体からださ。

あなた——どうでしょう、天狗様の方が股ももが裂けそうな大胡おおあく  
 坐らで、ずしんと、その松の幹こゝろへよりかかると、大袈裟な胡坐こゝろ  
 たら。あれなんです。むこうの、あの四角いような白い丘かみが、  
 お尻おしりの響ひびきでぶるぶると揺れるようなの。」

城下の果に霧を展ひらいて、銀線の揺れつつ光る海の上に、紅日、山の端はの松を沈むこと二三寸。煙のあとの森も屋根も、市街はしつとりと露を打って、みはらしの樹の間の人影は、毛氈もうせんとともに灰暗ほのぐらい。

いま振袖ゆびさの指した、丘の一つが白かった。

「図々しいじやあないの、（狐、さあ、夥間なかまづきあいに一つ酌をしてくれ。本来は、ここのこの塚は、白い幽霊の出る処だ。）親お仁様とっさん、まだ驚かすつもりでいるのかしら。」

「何、白い幽霊？」

と、聞き返すがごとくにして、衝つと膝かを折がって屈かめた。

「紅い鳥冠の鶏の——と云うのかね。」

「いいえ、それはそれは美しいおんな婦の方の。」

「……………」

「そして、白いのはお衣めしものも、ですけど、降り積る雪なんですつて。」

「その天狗が話したのかね。」

「ちびりちびりとウイスをのみながらだから。……いい加減お察しなさいよ。……こっちの木の葉より、羽団扇はうちわの毛でもちつとは増ましだろろうと思うから、お酌をしますとね、（聞け——娘。）と今度はお酌のお庇かげで、狐が娘になったんですがね。……そのかわり、羽団扇の方も怪しくなったの。でも、お話がお話だから、つい聞いたんですわ。」

九州の河童かっぱの九千坊くせんぼうとかではありませんけれど、この土地には、——御覧なさい、お城の奥の野の果はての黒い山に、八千坊といつて、むかし、数知れず、国一杯に荒廻つた天狗様を祀まつり籠こめた処があるんですつて。——（これ古服は黒し、俺おれは旅まわりの烏天狗で、まだいずれへも知ちかづ己きにはならないけれど、いや、何国いずこの果はてにも、魔まの悪戯いたずらはあると見える。わずかにこの十年ばかり前までは、うら枯がれの秋から、冬の時雨の夜へかけて、——迷児まいごの迷児まいごの何とかや——と鐘をたたいて、魔まに捉とられたものを探す声を、毎晩のように聞いて、何とも早や首を縮めたものでござります、……と昨夜ゆうべの宿で按摩あんまが饒舌しゃべつた。……俺の友だちで、十四五年以前に、この土地へ旅をしたものが。）ツて、元はげの親おとつ



仁さん様が言ったんですけど、——あなた、天狗にお友だちツてあるんでしよつか。」

「八千坊というくらいだから、皆それは友だちだろうね。」

つい聞入つて真顔で答えた。振袖は、島田の鬢びんをゆらゆらと、白歯で片頬かたほえみ笑えをしているのに。——

鬢かみのほつれに顔はなお白い。火沙汰に丘を駆けたというにも、襟裏くれないの紅あかのちらめくまで、衣紋えもんは着くずれたが、合あわせた褌つまと爪つ尖まさきは、松葉の二針相あいがつ合あしたようにきりりとしている。

「その貴方、天狗様の友だち……友だちの天狗様……あら、何だかこんがかりました。いえね、その自分で天狗だ、と云つた親お

とっさん  
仁様の友だちが、やがて十年ほど前に、この土地へ来なすつた時はたごも、旅籠はたごでとつた按摩が、やっぱりさ、ここ十年前までは、うら枯の秋の末から、冬の時雨の夜へかけて——迷兎の迷兎の何とかやーい……で、何とも早や首を縮めたものでござります、と話したと云うのを聞いた事があるから、こここの城下の按摩は、お景物話に、十年前の神隠しを話すのが習慣しきたりと見える。……

——親仁様がそう云いましてね。おんなじ杉山流だかどうだか知らないが、昨夜ゆうべの旅籠で夜が更ふけて、とにかく、そんな按摩の話した事だから、ほんとうかどうかは分らないけれど、——山の、ここの、この塚は——

親仁様が、貴方のおいでなさいました、その松に居直って、片

膝立てて、手首の長く出た流行はやらない洋服の腕で指さしを。「

おなじ状さまに、振袖をさしのべたが、すらりと控えた。

「いやだ、……鶴子饅頭が食べたそうだ、ほほほ。」

「むむ。」

多津吉は頬張るごとく頷うなずいた。

「やりたまえ。……第一形もよし、きれいだよ。敷いてある松葉

は毒にはならない。」

「ええ、私なんか、お腹なかがすけば、他国の茸きのこだって生で食べます。

人間は下ってますけれど、そんな事に掛けては仙人ですから、食ものに毒も薬もないんですが、実みを入れて、……何ですか、お聞き下さるようですから、一段語りましてから御祝儀を頂きますわ。

ね、洋服で片膝立てたのは変なものね、親仁様、自分で名告つた天狗より、桃を持たしたい、おおきな大な猿かに見えた事。

貴方、ここには、——この城下で、上手名人と言われたちかつね近常さんと……評判の、いずれ、そんな人だから貧乏も評判の、何ですかね、何とか家とか云ったけれど私にはよく分らない。  
ゆびわかんざし(指環も簪も拵えるのじや。)と親仁様が言ったからかざりや鏝職さんですわね。その方のお骨が納おさまっているんですってね。」

「ああ、鏝職——じゃあ男だね。」

「そうよ、ええ、もう随分のお年でしたって。」

「待ちたまえ。……骨の入っているのが、いい年の鏝職さん、近常か——それにしては、雪の中の美しい、……何だっけね、おんな婦人

の白い幽霊と云ったのはおかしいね。」

「まあ、お聞きなさいよ。——貴方は、妙に、沈んで落着いて、考え事をしているように見える癖に、性急だね、——ちよつと年をお言いなさい、星を占てあげますから。」

と熟と瞳を寄せつつ、

「星の性なら構わないけれど、そうでなくツて、そんな様子だと怪我をする事よ。路に山坂がありますから、お気をつけなさいかね。」

「怪我ぐらいはするだろうよ。……知己でもない君のような別嬪と、こんな処で対向いで話をするようなまわり合せじゃあ。

……」

「まあ、とんだ御迷惑ね。」

「いや覚悟をしている。……本望だよ。」

「嬉しい事、そんなにおつしやつて下さるんですもの、私かつて……お宿までもついて送つて行くわ。……途中で怪我なんかさせませんわ。生命いのちに掛けても。……」

多津吉はいささか気を打たれたように目を睜みはつた。

「同伴つれはどうなんだね、串じょうだん戯ごにも、そんな事を云つて、お前さん。」

「谷へ下りたから、あのまんま田畝たんぼへ出て、木賃へ引取りましようよ。もう晩方で、山に稼かせぎはなし、方角がそうなんですもの。」  
「だって、一座の花形を、一人置いて行きつこはななかうではな

いか。」

「そこは放し飼がいよ。外ねぐらに罅すきがないんですもの、もとの巢へ戻ると  
思うから平気なもの。それとも直ぐ帰れなんのつて、つれに來れ  
ば、ちよつと、隱おんぎよう形の術じゆつを使うわ。——一座の花形けいけいですもの。  
火遁かどんだつて、土遁どどんどろどろどろ、すいとんだつて、焼鳥やきとりだつてお  
茶の子ちやの子だわ。」

「しかし、それにしてもだね。」

「苦勞性くろうせいね、そんな星ほしかしら。」

「きみの星は！ 年は？」

「年は狐……星は狼。……」

「凄すこいもんだなあ。——そこで、今の話わだが。」

「ええ、——白い幽霊の訳はね、天狗様が按摩に聞いた話を、私にしたんですよ。……可よござんすか。

明治……あれは何年とか言いました、早い頃です。——その鏝かざりや

職りやの近常さんの、古畳の茅屋あばらやへ、県庁からお使者が立ちました。……頃あじはすつperi、頬髯ほおひげの房々と右左へ分れた、口髯のピ

ンと刎はねた——（按摩の癖に、よくそんな事を饒舌しゃべつたものね）

……もつとも有名な立派な方ですとさ、勸業課長さん、下役を二人、供に連れて、右の茅屋あばらやへお出向きになると、目貫めぬき、小柄こづかで、

お侍の三千石、五千石には、少わかいうち馴なれていなすつても、……

この頃といつては、ついで居まわりで見た事もない、大した官員様のお入いでですし、それに不意だし、また近常さんは目が近くつて、



耳が遠くつていなすつたそうですからね、継はぎさ、——もう御ご新造しんぞうさんはとうに亡くなつて、子一人、お老母おぼあさん一人の男やもめ——そのお媪おばあさんが丹精の継はぎの膝掛はを刎ねて、お出迎え、という隙もありやしますまい。古火鉢と、大きな細工盤しきとで劃つて、うしろに神棚まつを祀つた仕事場に、しかけた仕事の鉄鎚かなづちを持つたまま、鑿たがねをおさえて、平伏をなさると、——畳が汚いでしよう。けばが破れて、じとじとでしよう、弱つたわね、課長さん。……洋服のもつ立尻たてじりを浮かして、両手を細工盤について、ぬツと左右の鯨なまずひげ髯あいて。対手が近眼ちかめだから似合つたわ。そこへ、いまじやは流行はらないけれども割安の附木ほどの名刺を出すと、銕職の御老体、恐れ入つて、ぴたりとおじぎをする時分には、ついて来た、

羽織なしで袴はかまだけの下役が、手拭てぬぐいを出して、そツと課長さんのお尻の下へ当がうといった寸法ですつて。」

「光景み観るがごとし……くわし詳しいなあ。」

多津吉は苦笑した。

振袖は案外真面目で、

「……お亡くなんなすつてから、あと、直ぐに大層な値になつて、近常さんの品ものは、そうなると、お国自慢よ。煙管きせる一つも他国へ取られるな、と皆蔵しまいこ込むから、余計値が出るでしょう。贗にせもの沢山になつて、鑑定が大切だが、その鑑定を頼まれて確かなのが自分だつて、按摩、てのひら(掌に据えて、貫目を計つて、釣合を取つて、撫なでてかぐ。)……とそう云うんですつて、大変だわね。毛彫浮

彫の花鳥草木……まあ私のお取次ぎは粗ぞんざい雑ざいですよ。（匂がする、）と言うくらいだから、按摩、それから、それへ聞伝え、思い込んで、（近常の事は余程くわし悉しいようだ。）と天狗様が、私にさ、貴方、おじぎの仕方から、もつ立尻の様子まで……その昨夜ゆうべ宿しゆくで聞いたつていう按摩の遣った通り——按摩は這はいましたとき、話しながら。——私は時々お酌をしながら聞いていて、その天狗様に這われたらどうしよう、と思っただんですよ。いかに私だつて気味が悪い。」

「まさか、昼這う奴があるものか。」

と多津吉は投げるように言つて再び苦笑した。

「だつて、そこが魔ものじゃあなくつて？……それに酔つてるん

でしよう。ウイで沢山な処へ、だんだんスキツて来てるんですけどの。」

「何の事だい、スキツて来るとは。」

「私にも分らない、ほほほ。」

と、片褻かたつまを少し崩すと、ちらめく裳もすそ、紫の袖は斜ななめになった。

「承れ、いかに近常あたらたま——と更る処だわね。手拭しろうぎの床几しよくぎでさ。東

京に美術工業大博覧会がある。外国に対しても晴の仕事じゃから、第一は、お国のため、また県のため、続いては、親仁おやしの名誉のため、心血こころちを灌そそいだ出品をするように、——大仕事となれば、いづれ費用いりめも掛かろう。手間も要ろう。官より直接とは参らぬが、そこは有志の資本家と内約が結んである。どうじゃ、親仁。お国のた

め。——はツというので、近常さん、（阿母喜んで下さい。）と、火鉢で茶を入れていたおふくろさんと、課長殿の顔を見て、濃い眉の下に露一杯。

不景気だし、注文は取れず、くらしも、かつかつ。簪は銀の松葉、それはまだ上等よ。煙管は真鍮まで承つて、裁縫の指ぬきの、いまも名誉の毛彫の鑿が、針たての穴を敲いていなすつたつて処だつて言いますもの、職人に取つては、城一つ、国一郡、知行されたほどの、その嬉しさ。——ああ、降つたる雪かな。——

振袖は花やかに、帯の扇をぬいて開いて、片手を白く、折からこぼるる松に翳した。

「あとで御祝儀を遊ばせ。——法界屋の鉢の木では、梅、桜、松も縁日ものですがね、……近常さんは、名も一字、常世つねよが三ヶの庄たまわを賜たまわったほどの嬉しきで。——もつとも、下したじよく職しやくも三人入り、あばらや破屋あばらやも金銀の地金に、輝いて世に出ました。仕上り二年間の見み積つもりの処ところが、一年と持たず、四月五月よつきいつつきといううちから、職人の作料工賃にも差支えが出来たんですつて、——それがだわね、：

：県庁の息が掛かかつて、つなぎの資本をおろしていた大商人が、相場か何かで、がらがらと来て、美術工業の奨励、県庁のためどころではなくなつたんです。資本が続かないでしょう。近常さんは幾度も幾度も課長どのへ逢いに行き、縋すがつてもみたんだけれども、横はへ刎はねた頬髯ほくそが、ぐつたりと下つて弱よわっているの。人はいいん

だわね、畳は汚ながつても、さ。

有志の後援を頼みにしたので、お役所にそんな金子かねの用意はなかつたんです。さあ、そうなるかと頼んだ職人を断るにつけて、作料を渡すにさえ、御新造ごしんさんの記念かたみの小袖。……この方はね、踊のお師匠さんでしたとき。下方したかたもお出来なすつて、……貴方お聞きなさいよ。これなんだから、天狗様に熱を吹かれているうちにも、余計に、その近常さんが鼻ひい尻きになつたんですよ。……その小袖を年一度、七夕様だわね、鼓しらべの調を渡して、小袖の土用干をなさる時ばかり、花ももみじも一時いつときに、城も御殿うらやまも羨うらやましくないとお思ひなすつた、その記念かたみまで……箆たんす笥すはもうない、古葛籠ふるつづらの底から、……お墓の黒髪に枕させた、まあね……御経でも取出

すように、頂いて、古着屋の手に渡りましたッて、お可哀相に。

――

と、さし俯向うつむいて、畳んだ扇子おうぎで胸をおさえた。撫肩なでがたがすらすらと、薄すすきのように、尾上の風に靡なびいたのである。

「お待ちないよ、この振袖。失礼ですが、……色はさめました、模様も薄くなりました。でも、それだけに、どんな事で、これがその御新造ごしんさんのお記念かたみかも知れません。……この土地へ来ましてから、つい思いつきで、古着屋から買ったんですから。」

「ちよつと。」

「あら、なぜ、袖を引張ひっぱらないの、持たないんです。」

多津吉は、妙に唇をゆがめながら、



「余り不<sup>ぶ</sup>躑<sup>しつ</sup>らしいから。」

と云つた、大島の知らず、緋<sup>かすり</sup>の羽織の袖を、居寄つて振袖の紫に敷いて熟<sup>じつ</sup>と瞻<sup>み</sup>たのであつたが、

「せめて、移り香を。」

「厭<sup>いや</sup>味<sup>み</sup>たらしい、およしなさい、柄にもない。……じゃあ私も気<sup>き</sup>障<sup>ざ</sup>をしてよ。」

するりと簪<sup>かんざし</sup>を抜くと、ひらひらの薄<sup>すすき</sup>が、光る鞞<sup>まり</sup>のように、袖と袂<sup>たもかき</sup>と重つた上へ、鬢<sup>びん</sup>の香を誘つて落ちた。

「しばらくそうしていらつしやい。——離れないお禁<sup>まし</sup>厭<sup>ない</sup>よ。」

「竜胆<sup>りんどう</sup>以上に嬉しいなあ。」

と、寂しそうに笑つた。

「御挨拶だわね。——狐の尻尾よ。その実は。……暗くなったら  
ひらひら燃えるかも知れませんよ。」

いえね、狐火でも欲しいほど、洋燈ランプがしよんぼり点ついたばかり、  
それも油煙くすぶに燻くすぶつて、近常さんの内うちはまた真ま暗くらになりました。

……お正月しんがれがそれなんですもの。霜しも枯がれの二月まつくらをお察みしなさい。

お年としよりは台所うちで寒ひやの中の水仕事みづしごと、乏せしいお膳ぜんの跡片あとづけ、それ  
も、夜よのもう八時はちじすぎ九時くじぐらい。近常ちんじょうさんは、ほかに身みの置場おち  
所ところのない仕事場しごとばで、さあ、こうなると酷ひどいものです。……がら落おち  
の相場師さばいは、侠氣きあはあつても苦しい余あまりに、そちこち、玉子たまごの黄わう  
味あじぐらいまで形かたちのついた。……」

ふと黙もくつて、

「待つて下さい、形は似ていますけれどもね、いま玉子を言つては不可いけない。ここへ、またお使者が飛んで来て、鶏の因縁になるんですから。」

「……………」

「そうね、ほんのりと雲と波が明あかるくなつたツて言いましようか。それツてというのが、近常さんの一代の仕事として、博覧会へ出品しようとおもくろみなすつたのが、尺まわりの円まるがた形の釣香つりこうろ炉でしたとき。地の総銀一面に浮彫の波の中に、うつくしい竜宮を色で象ぞうが嵌んに透かして、片面へ、兔を走らす。……蓋ふたは黄金無垢きんむくの雲の高彫に、千羽鶴を透すかし彫ぼりにして、一方の波へ、毛彫ささえの冴さつで、月の影を颯さつと映そうというのだそうですから。……

黄金の雲なんか真先よ。——銀の波も……こうなると、水盃だわね、疾とつのむかし、お別れになつて、灰神樂はいかぐらが吹溜ふきたまつたよ。うな、手づくねの蠟ろう型がたに指のあとの波の形の顕あらわれたのを、細工盤に載せたのを、半分閉じた目で熟じつと見まもつて、ただ手は冴えても、腕は鳴つても、遣場やりばのない鉄鎚かなづちを取りしめて……火鉢に火はなし、氷のように。

戸外おもては大雪よ、貴方。

……あら、簪かんざしが揺れるわ、振落そうとするんじゃないやあなくつて？  
……邪慳じゃけんよ。そうしといて頂戴、後生だから。

一時、……無念、残念に張詰めた精もつきて、魂も抜けたように、ぐつたりとなつたのが、はツと気が着いて、暗い間まの内を見

なさいますとね、向う斜ななめの古戸棚しきを劃しつた納戸境の柱かかに掛かつていた、時計がないの。

時計がさ、御新造ごしんさんが、その振袖の時分に、お狂言か何かで、御守殿から頂戴なすツたつて、……時間なんか、何なんどき時どきだか、もう分らないんだそうですね、打つと、それは何ともいえない、好い音ねがするんです。一つ残つた記念かたみだし、耳の遠い人だけに、迦陵頻伽かりようびんがの歌のように聞きなすつたのが、まあ！ ないんですよ。目のせいか、と擦こすりながら、ドキドキする胸で、棒立ちに、仕事場を出て見なすつたそうですね、……盗まれたに違いない。

——— そうですね、黒い影が壁から棚前を伝つた気がする、はッ盗まれた、とお思いなさると、上うえ下した一度にがツくりと齒が

抜けた気と一所に、内がポカンと穴のように見えて、戸障子も、  
 どんでん返し——ばたばたと、何ですかね、台所の板の間を隔て  
 の、一枚破やれぶすま襖かに描いた、芭蕉の葉の上に、むかしむかしから  
 留かたつむりまっていた蝸牛まっしろが、ころりと落ちて死んだように見えたん  
 ですとさ。……そこが真白な雪になりました……突抜けに格子  
 戸が開いたんです、音も何も聞えやしない。」

「もつともだね、ああ、もつともだとも。」  
 と呻うめくように多津吉は応じた。

「葉へも、白く降積つたような芭蕉の中から、頬ほおかぶり被かぶりをした、  
 おかしな首をぬつと出して、ずかずかに入った男があるんです。  
 袴はかまの股もも立もちを取っている。やあ、盗賊どろぼう——と近常さんが、さが

んなさると、台所から、お媪ばあさんが。――

幕末ごろの推おしこみ込こみじやアあるまいし、袴の股立を取った盗賊どろぼうもおかしいと、私も思つたんですけれどもさ。その股立が、きよろツとして、それが、慌あわてて頬被を取ると、へたへたと叩頭おしぎをしました。（やあ、大師匠、先生、お婆々ばばさま様ツ。）さ、……お婆々様は氣障きざだけれども、大層な奉りようなんですとさ。

柴山運八といつて、近常さんと同業、鋳屋さんだけれども、これは美術家で、そのお父とうさんというのが以前後藤彫で、近常さんのお師匠さんなんですつて。――いまは、その子運八の代で、工場を持つて、何とか閣で、大きな処を遣つている。そこの下職人が駆込んだ使いなんです。もつとも見知合いで、不断は、おい、

とっさんか、せいぜい近小父、でも、名より、目の方へ、見当をつける若いものが、大師匠、先生は……ちよつと、尋常事ただごとではないでしょう。

大切な事を頼みに来たの。

あの、大博覧会の出品ね——県庁から、この銚かざり職へお声がかりがある位ですもの。美術家の何とか閣が檜ひのき舞台へ糶せりだ出さない筈はずはないことよ。

作は大仕掛な、床の間の置物で、……からくさたかまきえ唐草高蒔絵ふたつえの両柄の車、——曳ひけばきりきりと動くんです。——それに臙しづい銀台いちだいの太鼓に、七賢人を象ぞう嵌がんして載せた、その上へ銀の鶏を据えたんです。これが呼びものの細工ですとさ。



工芸も、何ですか、大層に気を配って、……世の泰平をかたどった、諫鼓——それも打つに及ばぬ意味で……と私に分るように、天狗様は言つたんですがね。苔深うして何とかは分りませんでしたわ。……塚に苔は生えていません。」

と扇子の要で、軽く払うにつれて、弱腰に敷くこぼれ松葉は、日に紅く曼珠沙華の幻を描く時、打重ねた袖の、いずれ綿薄ければ、男の衞も、落葉に透くまで、薄の簪は静である。

「……その諫鼓とかの出品は、東京の博覧会で感状とか、一等賞とか、県の名誉になつたそうです。——ところでですね、股立を取つた趣は、羽にうつ石目一鑿も、残りなく出来上つて、あとへ、銘を入れるばかり、二年の大仕事の仕上りで、職人

も一同、羽織、袴で並んだ処、その鶏の目に、瞳を一点打つとなつて、手が出ません、手が出ないんですとき。（おいでを願つて、……すぐにおいでを願つて、願つて、大師匠、先生に一鑿、是非とも、）と云うんだそうです。……城下でも評判だったと言いますし、師匠の家だし、うち近常さんも、時々仕事中に、まあね、見学といった形で、閣へ行きなすつたものですから、鶏の工合は分つています。

お媼ばあさんは、七輪しちりんの焚落たきおとしを持っていらつしやる、こちらへと、使者を火鉢に坐らせて、近常さんが向直つて、（阿母おつか、一番鶏ちばんどりが鳴きました。時計はのうても夜は明けます。……鶏の目を明けよ、と云うおおせ、しかも、師匠のお家から、職人冥加みょうが）

に叶かないました。御辞退を申す筈なれども、謹んで承ります。)  
 (おう、ようしてござれ。) お使者つかいが、(やあ、難ありがた有い。)と  
 なりました。

お年よりが、納戸の葛籠つづらを、かさかさとお開けなさるのに心着  
 けて、(いや、羽織だけ、職人はこれが礼服。)と仕事着の膝を  
 軽くたたいて、羽織を着て、仕事場の神棚へ、拝をして、ただ一  
 つ櫂けやきの如輪木じよりんぼくで塵ちりも置かず、拭ふき込んで、あの黒水晶くろすいしゅうのような鑿た  
がねだんす 箆筒へいとう、何千本か艶つやつや々と透通ひきだしるような中から、抽斗ひきだしを開けて  
 取ろうとして——(片目じやろうね。)——ツて天狗様てんぐさまが、うけ  
 売うりのうけ売で話をする癖に、いきなり大おおきな声こゑをしたから、私吃びつく  
 驚おどした!……ちよつと、おまけに、大目玉八貫小僧おほめだまはつくわんせうのように、

片目を指の輪で剥き出すんですもの。……

職人も吃驚しましたって、ええと聞くと、（片目は富さんが入れましたでござりましたよう。）——この富さんとかいうのはね、多勢職人をつかった、諫鼓、いさめのつづみの……今度の棟とうりよ梁うで、近常さんには、弟分だけれど相弟子の、それは仕事の上手ですつて。

近目と貧乏は馬鹿にしても、職にたずさわる男だけに、道の覚悟はありました。使者の職人は、悚ぞつとするなり、ぐったりと手を支つきましたとき。言われる通り、たった今、富さんが、鶏の瞳めを入れようとして、入れようとして幾たびか、鉄かなづち鎚づちを持ったんだそうです。（片目は見事に入れますが、座をかえて、もう一

つのは息が抜けます、精が続かない。こうではなかつたと思つが、お恥かしい、）と、はたで何と勧めても、額から汗を流して、（兄哥あにきを頼みましょう、お迎え申して、）という事だつたのを、近常さんが、ちやんと、……分つてゐるんですもの——富に両方の目は荷に余る、しかし片目は入れたらう、とそれで、そう云つて聞いたんですわね、……凄すこかつたわ、私……聞いていて、……（いや、両方とも先生に、）というのを聞いて、しばらく熟じつと考えて、鑿たがねを三本、細くつて小さいんですとき。鉄鎚かなづちを二挺ちよう、大きな紙入の底へ、内懐へしつかりと入れて、もやもや雲の蠟ろう型がたには、鬱金うこんの切きを深く掛けた上、羽織の紐ひもをきちんと結んで、——

—お供を。——

道は雪で明あかるいが、わぎと提ちようちん灯、お仏壇の蠟燭ろうそくを。……亡  
 き父はじめ、恋女房。……」

振袖の声が曇ると、多津吉も面おもてを伏せた。

「御先祖へも面目に、夜の錦にしきを飾りましょう。庭の砂いさごは金銀の、  
 雪は凍こった、草履よしで可、……瑠璃るりの扉とぼそ、と戸をあけて、碑しやくこ礫のゆ  
 きげた瑪瑙めのうの橋と、悠然と出掛けるのに、飛んで来たお使者は朴ほお  
 の木齒たかあしだの高下駄、ちよつと化けた山伏が供をするようだわ。こ  
 うなると先生あつかい、わぎと提灯も手に持つてさ。

パツと燃え立つ毛氈もうせんに。」

夕日は言ことばに色を添え、

「鶏が銀に輝やいて、日の出くれないなぎの紅の漲なるような、夜の雪の大広間、

まきえ  
 蒔絵の車がひとりでに廻るように、塗膳ぬりぜんがずらりと並んで、細

工場でも、運八美術閣だから立派なのよ。

鶏を真まんなか中にして、上座には運八、とそれに並んで、色の白い、

少し病身らしいけれども、洋服を着た若い人で、髪を長くしたのが。」

と、顔ななめを斜に見越しながら、

「貴方なんでも遣りそうな柄だわね、髪を長く……ほほほ、遣った事があるんでしよう。似合うかも知れない事よ。」

「まあ、可い。……その髪の長いのは。」

「東京の工芸学校へ行っている運八の息子なの……正月やすみで帰っていて、ここで鶏に目が入り次第、車を手舁てかきで床の正面へ据

えて、すぐに荷拵にぎしらえをして、その宰領をしながら、東京へ帰ろう手筈てはずだったそうですわ。……仕上りと、その出発祝たちいわいを兼ねた御馳走の席なのよ。

末座で挨拶をして、近常さんは、すぐに毛氈の上をずツと、鶏のわきへ出なさると、運八の次に居た、その富さんが座を立て出て、双方でお辞儀をして、目を見合つて、しばらくして、近常さんが二度ばかり黙つて頷くと、懐中ふところの鑿たがねを出したんです。

髪の長い、ネクタイの気取つたのが、ずかずかとそこへ出て来て、

——やあ、親仁おやし。——

——これは若旦那様。——



——僕の学校の教授がね、教授、教授がね、親仁の作を見て感心をしていたよ。どこかで何か見たんだって。——

——東京の大先生が、はッ恐れ多い事で。——

——鑿を見せたまえ。——

——いや、くるいが出るとなりません。——

——ふうむ、何かね、鳩の目と、雀の目と、鳩……たとえばだ  
な、鳩の目と、鶏の目と、使う鑿が違うかね。——

——はあ、鈴虫と松虫とでも違いますわ。——

一座が二十六七人、揃って顔を見合わせると、それまで、鼻の隆<sup>たか</sup>い、長<sup>なが</sup>頤<sup>あご</sup>を撫<sup>な</sup>でていた運八が、袴<sup>はかま</sup>のひだへ手を入れて目礼をしたんですって。

鉄鎚かなづちをお持ちの時、手をついていた富棟とुरりよう 梁ようが、つつとあとへ引きました。

その時に近常さんは、羽織の紐を解いて……脱がないで、そして気構えましたッて。……」

振袖は扇子おうぎを胸に持据えて、

「……片膝を軽く……こうね、近常さんが一方へお引きなされると」

簪かんざしは袖とともに揺れつつも、

「鑿を取った片肱かたひじを、ぴったりと太鼓に矯ためて、銀の鶏を見据えなすった、右の手の鉄鎚かなづちとかね合いに、向うへ……打つんじ

やあなく手許てもとへ弦つるを絞るように、まるで名人の弓ですわね、トンと矢音に、瞳が入ると、大勢が呼吸いきを詰めて唾つをのんでいる、その大広間の天井へ、高く響いて……」

ハツと多津吉が胸を窪ませ、身を引くのと、振袖きつが屹きつと扇子を上げたのと同時であつた。——袖がしなつて、両ふたつに分れた両方の袂たもとの間が、爪さき深く、谷に見えるまで、簪すずきの薄の穂のひらひらと散つて落つる処を、引ひきしめたままの扇子で、さそくに掬すくつたのが、かえつて悠揚さまたる状で、一度上へはずまして、突羽つくばね子のようについて、翻ひるがえる処を袂の端で整然ちやんと受けた。

「色気はちよつと預りましたよ。大切な処ですから。……おお、あついで……。私は肌が脱ぎたくなつた。……。これが、燃立つよう

なお定まりの緋縮緬ひぢりめん、緋鹿子ひがのこというんだと引立つんですけれど  
 もね、半襟の引きはぎなんぞ短冊形に、枕屏風まくらびょうぶの張交ぜじや  
 あお座がさめるわね。」

と擦さするように袖を撫でた。その透切すきぎれした衣きぬの背に肩に、一城  
 下をかけて、海に沈む日の余波なごりの朱を注ぐのに、なお意気は徹とおつ  
 て、血が冴える。

「でも、一生懸命ですわ。——ここを話して聞かせた時のウイス  
 キイ天狗の顔かおつき色を御覧なさい。目がキラキラと光ったんです。  
 ……近常さんが、その鑿で、トンと軽く打って、トンと打つと—  
 —給仕に来ていた職人の女房たち、懇意の娘たちまで、気を凝ら  
 して、ひっそりした天井に、大きく飮くだまするように響くのに、鶏は、

寂と据つて、毛一つも揺れなかつたそうなんですよ。鑿をきめて、  
 熟と視ていなさるうちに、鉄鎚が柔かに膝におりると、（可。）  
 とその膝を傍へ直して、片側へ廻つて、同じように左の目を入れ  
 たんですとさ。……天狗の目がまた光るのよ。……

ひときり  
 一時、何となく陰々とした広間が、ぱつとまた明るくなりますと  
 ね、鶏がぐるりと目を覚まして、莞爾笑つたように見えたんで  
 すつて。——天狗が、同じように笑つたから不気味でしたの。

そこへ、運八美術閣をはじめ、髪の長いのはもとよりですわね、  
 残らず職人が、一束ねに顔を出す……寒の中でしょう、鼻息が白  
 く立って、頭が黒いの。……輝く鶏の目のまわりに。

近常さんと、富さんは、その間に、双方手をつき合つて挨拶を

なさいました。それから、また直ぐに、近常さんが、人の顔と頭の間で、ぐつと鶏の蹴爪けづめをおさえたんですつてね、場合が場合だもんだから、何ですか……台の車が五六尺、ひとりでにきりきりと動出すのに連れられて、世に生れて、瞳の輝く第一番に、羽搏はたき打つて、宙へ飛ぼうとする処を、しつかり引留めたようでしたとさ。

それはね、近常さんが、もう一本のたが鑿ねで、——時を造る処ですから、翼を開いていきましょう。——左の翼の端裏へ、刻印を切ろうとなすつたんです。絵ならば落款なんですわね。（老夫おやじ！ 何をかする？）運八がね、鉄鎚かなづちの手の揚る処を、……ぎよつとする間もなかったものだから、いきなりドンと近常さんの肩を突いて、

何をすると怒鳴りました。これに吃驚びっくりして、何の事とも知ら  
 ないで、気の弱い方だから、もう、わびをして欲しそうに、夥間なかも  
 の職人たちを、うろうろとみまわしながら、（な、なんぞ粗忽そそくでも。）  
 お師匠筋へ手をつくすと、運八がしやりしやりと、袴の膝で詰寄つ  
 て、（汝われというものは、老夫おやじ、大それた、これ、ものも積つて程  
 に見ろ。一県二三ヶ国を代表して大博覧会へ出品をしようという、  
 俺おれの作に向つて、汝われの銘を入れる法があるか。退れしき、推参な、無  
 礼千万。これ、悪く取れば仕事を盗む、盗賊どろぼうも同然だぞ。余り  
 の大ものに見驚きして、気が違いかけたものであろう。しかし、  
 詫わびるとあれば仔細しさいない。一杯たらそう。）いやな言ことばだわね、こ  
 の土地じゃあ、目下に、ものを馳走などする事を（たらす）ツて

言うんですって、（さ、さ、さ、皆、膳につけ、膳につけ。）

（いや、あの状でも名誉心があるかなあ。活きとるわけだ。）と毛の長い若旦那は、一番に膳について、焼ものの大鯛から横むしりにむしりかけて、（やあ、素晴らしい鯛だなあ。）場違ですもの、安いんだわ。

沈み切っていた、職人頭の富さんが、運八に推遣られて坐に返ると、一同も、お神輿の警護が解けたように、飲みがまえで、ずらりとお並びさ、貴方。

近常さんは、驚いたのと、口惜いのと、落胆したのと、ただ何よりも恥かしさに、鑿と鉄鎚を持ったなりで……そうでしょうね——俯向いていなさいましたって、もうね、半分は、気もぼう



としたんでしようのに、運八の方では、まだそうでもない、隙を見て飛とびついて、一鑿、——そこへ掛けては手鍊てだれだから——一息に銘を入れはしまいかと、袴の膝に、拳こぶしを握にらつて睨にらんでいる。

私なんぞ、よくは分りはしませんけれど、目はその細工の生命いのちです。それを彫なつたものの、作人と一所に銘を入れるのは、お職人の習慣なだと言わいますもの。——近常さんのおもいでは、せめて一生に一度——お国のため、とまで言なつて下くだすつた、県庁の課長さんへの義理、中絶なかだえはしても、資本もとでを出した人への恩返し。：

：御先祖がたへの面目と、それよりも何よりも、恋女房の御新造ごしんぞさんへ見みせたさに、わざと仏壇の蠟燭を提灯に、がたくり格子も瑠璃るりの扉とぼそ、夜の雪の凍いてた道さえ、瑪瑙めのうの橋はしで出なすつたのに：

…ほんとうにその時のお胸のうちが察しられます。

運八の女房おかみさん——美術閣だから、奥さん——が、一人前、別

にお膳を持って、自分で出ました。……ちよつと話があるんです

……この奥さんは、もと藩の立派な武家のお嬢さんで、……近常さんの、若くて美男だった頃、そちらから縁談のあつた事があるんですとき、——土地の按摩はくわしいんですわね——（見染められたんだ、怪しからん。）——そう云つて、お天狗は、それまでの氣組も忘れて、肩を大おお揺ゆりに、ぐたぐたしたのよ。

もつとも、横合から、運八のものになつた事はお話するまでもないでしょう。姿も、なよやか、氣の優しい奥さんですつて。

膳をね、富さんの次へ置こうとするのを、富さんが、次へ引いて、

上の席へ据えました。そして二人で立つて来て、富さんは膝を支  
 いて手を挙げる。(さあ、ね、近常さん。)と奥さんが背中を擦  
 るようにして言われたので、ハツとする。鶏の涙、銀の露、睫毛  
 の雫。——腰を立てても力のない、杖にしたそうな鉄鎚など、道  
 具を懐にして、そこで膳にはついたんだそうですけれど、御酒一  
 合が、それも三日め五日めの貧の楽みの、その杯にも咽せるんで  
 すもの。猪口に二つか、三つか、とお思いなすつたのが、沈んで  
 ばかり飲むせいか、……やがて、近常さんの立ちなすつた時は、  
 一座大乱れでもって、もうね、素裸の額へ、お平の蓋を顛巻で  
 留めて、——お酌の娘の器用な三味線で——(蠟 螂や、ちよ  
 うらいや、蠅を取って見さいな)——でね、畳の引合せへ箸を立

てて突刺した蒲鉾かまぼこを狙ねらつて踊おどっている。……中座だし、師匠家  
 だし、台所口から帰る時、二度の吸ものの差図をしていなすつた  
 奥さんが、（まあ、……そうでございませうか。——お嬢ばあさんにお  
 土産は、明みょう朝あさ、こちらから。……前に悪い川があります、河か  
 太郎わおそが出来ますから気をつけてね。）お嬢さんらしいわね、むかア  
 しの……何となく様子を知つて、心あつての言ことばでしょう。河太郎  
 の出る、悪い川。——その台所まで、もう水の音が聞えるんです  
 って、じゃぶじゃぶと。……美術閣の門の、すぐ向うが高台の町  
 の崖つづきで、その下をお城の用水が瀬を立てて流れます。片側  
 の屋敷町で、川と一筋、どこまでも、古い土塀が続いて、土塀の  
 切目は畠はたけだつたり、水田みずただつたり。……

旧藩の頃にね、——謡好きのお武家が、川べりのその土堀の処を、夜更けて、松風、とかをうたつて通ると、どこかその堀の中——中ならいいんですけど、壁が口を利くように、ウウと、つけ謡でうたうんですとき。どこまでも歩行あるけば歩行くほど土堀がうたいます——余り不思議だから、熊野ゆや、とかに謡いかえると、またおなじように、しかも秘曲だというのを謡うもんですから、一ぱし強気ごうきなのが堪たまらなくなつて駆出すと、その拍子に頭から、ばしやりと水を浴びせられた事なんかあるんですつて。……またある武士さむらいが、夜半よなかに前へ立つ、怪あやしい女を、抜打ちに斬きりつけると、それが自分の奥方の、夢から抜出した魂だつたりしたんですつて……可厭いやな処……

——河童かっぱは今でも居ますとさ。

近常しよんぼりさんは悄しよんぼり然しよんぼりと、そこへ台所口から藪やぶについて出て行くんです。

座敷では、じゃかじやかじやん……ここらは本職だわね。」  
と、軽い撥ぼちを真似まねて、白い指を弾はじいた。

「頭の顱さくらじゃあないけれど、額の腕ふたの蓋ふたは所作真盛まっさかり。——  
(蠅螂せうろうや、ちようらいや、蠅せうを取って見さいな)——裸で踊って  
いるのを誰だと思つて?……ちよつと?」

「あ。」

多津吉は吃驚びっくりしたらしい顔を上げた。渠かれは面おもても上げないで聞いたのである。

「……それがね、近常さんを、お迎いに行つた職人なのよ——全体、迎いに行つてから、美術閣での様子なんぞは、この職人が、いきなり（目は一つだけか。）と言われてから以来、ほんとうに大師匠だと恐入つて、あとあとまでも、悉しく細く、さし合のな  
い処でさえあれば、話すのを、按摩も、そつちこつちから、根穿り葉穿りして、聞いたんだそうですがね。——大師匠だと恐入つても、その場の事は察し入つても、飲んだ酒にも酔えば、娘  
子には浮かれるわ……人間ですもの。富さんが、禪のみつを引張つて、（諫鼓の荷づくりを見届けるまで、今夜ばかりは、自分の目は離されぬ。近常さんの途中の様子を。）（合点。）……で、  
いずれ、杯のやりとりのうちに、その職人の、気心が分つたんで

しよう。わぎと裸はだか体に耳打ちすると、裸はだか体に外がい套とうを引被ひっかぶつて、  
 ……ちつとはおまけでしようけれどもね、雪ひとすじ一条、土塀と川で、  
 三途さんずのような寂さびしい河か岸し道みちへ飛出として、氣を構かまえて見みますとね、  
 向むかうへとぼとぼと行ゆくのが、ほかに人通ひとりのある時とき刻じやなし、  
 近ちか常じょう小父せうさん。——その向むかうに、こんな夜更よふけには、水みづの妖まじ精ものが、  
 面かおを出だして、人ひと間ま界がいを覗のぞく水目みずめ金がねのような、薄うす黄き色いろな灯あかりが、ぼ  
 うとして、(蕎麦そばアウウ……)——と呼よぶんんです。振ふ売うの時とき、チ  
 リンチリンと鳴なりますが、似にているかららつて、風ふう鐸りん蕎麦そばと云いうん  
 だだそうそうです。聞きいても寒さむいわね。風ふう鐸りんどどころころですか、荷にの軒のきから  
 氷つらら柱はしらが下くだつて。

——蕎麦を一つ、茶碗酒を二杯……前後あとさきに——それまでかまぎ 蠟



螂つちよが蟋蟀こおろぎに化けて石垣しやがに踞じんで、見届けますとね、熟じつと紙入  
 を出して見ていなすつたつけ、急いで勘定して、（もう一杯、）  
 その酒を、茶碗を持ったまま、飲まないで、川岸へ雪を踏みなす  
 った。そこに、石で囲つて、段々があるんです。」

「うむ、ある。」——

と、多津吉が不意に云つた。

女もうつかりしたように、

「ざぶり、ざぶりと、横瀬を打つて気味が悪い。下り口の大きな  
 石へ、その茶碗を据えなさいますとね、うつむいて、しばらく拝  
 みなすつた。肩つきが寂しいでしょう。そんなに煽あおりき切つたのに、  
 職人も蕎麦の行燈あんどんで見た、その近常さんの顔が土気色つちけだという

んですもの。駆寄ろうとする一息さきに、蕎麦屋がうしろから抱留めました。」

「難<sup>ありがた</sup>有<sup>い</sup>い。ああ、可<sup>よ</sup>かつた。」

「だから、貴方は慌てものだと、云うんですよ……蕎麦屋も慌てものだわね。爺<sup>じい</sup>の癖<sup>い</sup>に。近常<sup>じじい</sup>さんが、（身投と間違えられましたか。）……そうではない。——（よそ様のお情で、書生をして、

いま東京で修行をしている<sup>せがれ</sup>俵<sup>せがれ</sup>めが、十四五で、この土地に居ます

うち、このさきの英語の塾へ、朝稽古<sup>あさげいこ</sup>に通いました。夏は三時

起<sup>おき</sup>、冬は四時起。その夏の三時起に、眠り眠りここを歩<sup>ある</sup>行<sup>ある</sup>いて、

ドンと躓<sup>つまず</sup>いたのがこの石で、転ぶと、胸を打って、しばらく、息

を留めた事がござりました。田舎寺のお小僧<sup>おこぞう</sup>さんで、やつぱり朝

稽古に通う、おなじ年頃の仲よしの友だちが来かかつて、抱起したので助たすつて、胸を痛めもしませんが、もう一息で、睡ねむりながら川へ流れます。すればこの石は大恩人。これがあつたために躓つまずいたのでござりませぬ。石は好いい心持でいる処を、ぶつかつたのは小兒こどもめの不調法。通りがかりには挨拶をしましたが、仔細しさいあつて、しばらく、ここへ参るまいと存ずるので、会釈に一献進ぜました。……いや思出せば、なおその昔、倅おなかが腹おに居ります頃、女房と二人で、鬼き子母神様へ参おま詣をするのに、ここを通ると、供えものの、石榴ざくろを、私が包から転がして、女房が拾いまして、こぼれた実を懐ふと紙ころがみにつつまみながら、身からだ体の弱い女でな、ここへ休んだ事もあります。御祝儀なしじゃ、蕎麦屋さん、御免なさ

れ。は、は、は。と、寂し<sup>さみ</sup>そうに笑つて、……雪道を——（あ  
あ、ふつたる雪かな、いかに世にある人の面白う候らん、それ雪  
は鷺毛<sup>がもう</sup>に似て、）——と聞きながら、職人が、もうちつと思つ  
のに、その謡が、あれなの、あれ……」

「ええ。」

「そのおなじ謡が、土塀の中からも、嗚<sup>しやがれごえ</sup>声<sup>こゑ</sup>で聞こえるので、  
堪<sup>たま</sup>らなくなつて、あとじさりをしながら、背後<sup>うしろ</sup>を見ると、今居た  
と思う蕎麦屋が影もなしに雪に消えたので、わつと云うと、荷の  
あつた前を山を飛越すように遁<sup>に</sup>げたんですつて。

——話は岐路<sup>えだみち</sup>になりますけれども、勉強はしたいものですわ  
ね、そのお小僧さんは、ずつと学問を、お通しなすつて、いまで

は博士で、どこのか大学の校長さんでいなさるそうです。肝心の、近常さんの<sup>せがれ</sup>の倅ですがね。」

「倅……成程。」

「それは、から、のらくらしていて、何だか今もって、だらしない人だつて。……（それほどの近常さん宗旨の按摩に、さっぱりひいきがないんだから、もって知るべしだ。）とそう云つてね、天狗様も苦り切つていたわ。」

「大きにもつともだ。もって知るべしだ。成程。」

「ひどく、感心するんだわね。」

「いや、何しろもつともだから。」

「まったくだわね。」

「——そこで、どうなったんだらう。それから。」

「お察しなさいよ……どうなる、とお思いなさるの？ あなた、

なまじつか、御先祖のお位牌いはいへも面目、と思いなすつただけに、

消した蠟燭ろうそくにも恥かしい。お年よりに愚痴を聞かせれば、なお

不孝。ろくでなしの伴には言つたつて分らないし、それに東京へ

行っているし、情なさなさけの遣場やりばのない、……そんな時、世の中に、

ただ一人、つらい胸を聞かせたし、聞いて欲ほしし、慰めてももらい

たいのは、御新造さんばかりでしょう。近常さんは、御自分の町

を隔てた、雪の小路こみちを、遠廻りして、あの川。」

と云つて、松の枝ずれに振袖がすつと立った。——「あの橋、

……」

姿の紫を掛けはせずや。麓ふもとを籠こめて、練絹ねりぎぬを織ぬつて流るる川に、渡した橋は、細く解いた鼓の二筋の緒に見えた。山の端はかえす夕映の、もみじに染まつて。……

——その橋も、麓の道も、ただ白かった——と云つて袖を翻かえした、手も手先も、また、ちらちらと雪である。

「ちらほらここからも小さく見えますね、あの岸の松も、白い蓑みのを被かいで、渡つておいでの欄干は、それこそ青く氷こおつて瑪瑙めのうのようです。ですけれども、真夜中ですもの、川の瀬の音は冥土めいどへも響きそうで、そして蛇籠じやかごに当つて碎ける波は、蓮華れんげを刻むように見えたんですつて。……極楽も地獄も、近常さんには、もう夢

中だつたんですわね。……

ついでに、あちらを御覧なさいまし。あの山の出端でつばなに一組、

いま毛氈もうせんを畳み掛けているのがありましよう——ああ一人酔つ

ている。ふらふら子ぼうふら子ぼうふらのようだわね……あれから、上へ上へと

見みはらし霽はらしの丘になつて、段々なぞえに上る処……ちようどこのこと同

じくらいな高さの処に、」

振袖姿は、塚と斜めに立っている。

「樹林きばやしがこんもりして、松の中に緋葉もみじが見えましよう。他所よその

より、ズツと色の冴えました、ね。もう御堂も壊れ壊れになりま

したし、それだし、この辺を総体にこうやつて、市の公園のよう

にするのにつけて、御本尊は、町方の寺へ納めたのだそうですが、



あすこに、もと、お月様の御堂がありました。……お月様の森の、もみじですもの、色は照りますわ。——余り綺麗だから、ひとはふたは一葉二葉、枝のを取って来たのを——天狗がですよ。白い饅頭にさして、その紅い鳥冠あか とよさかにしたんだって言ったんですがね。

——市から監督につけておく、山まわりの巡吏おまわりに、小酷こつぴどく叱むしられましたとき、その二三枚葉をつたのを。……天狗でも巡吏にはかなわないうですわね。もつとも、手でなんぞ尋常なんじやなくツて、羽団扇はうちわで払はたいたのかも知れません。……ああ、あの、もみじ緋葉がちらちらと散りますこと。ひとりで散れば散るんですけれど。……この風の止やんだ静かな山の暮方に、でもどこかそこの丘の上から、意趣返しに羽団扇で吹かしているのかも知れません

「<sup>はげなら</sup>兀並んだ丘は一つずつ、山深き奥へ次第に暗い。」

「近常さんは、それですから幻の月の世界へ、<sup>すが</sup>縋りついて攀<sup>よじのぼ</sup>上

るように、雪の山を、雪の山を、ね、貴方、お月様の御堂を<sup>あて</sup>的に、

氷に<sup>すべ</sup>迂り、雪を抱いて来なすつて、伏拝んだ御堂から——もう高<sup>た</sup>

<sup>かひく</sup>低はありません、一面白<sup>しろたえ</sup>妙なんですから。（今戻つたぞ、こ

れの、おお、この寒いに、まだ石碑さえ立てないで、面目ないが、

ほかに行く<sup>ゆ</sup>処は、ようないのじゃ。）とこの塚に、熱い涙をほろ

ほろと挨拶をなすつた心の裡<sup>うち</sup>。……貴方、お世辞にでもお泣きな

さいよ、……私も話すうちに、何ですか、つい悲しくなつて来た

。」

と、眩まばゆそうに入い日に翳かげす、手を洩もるる、紅くれないの露つゆはあらなくに、  
 睫毛まつげは伏ふつて、霧きりにしめやかな松まつの葉はより濃こまかに細こい。

「いや、どうも、私も先刻さつきから、何なにだか。」  
 と、なぜか多津吉は肩かたを揺ゆつて、首うなだ垂たれた。

「その時ときですつて、枝えだも風かぜに鳴なららずずに、塚つかも動うごかないでいて、こ  
 のお墓はかしよ所ところが、そのまま、近常ちんじょうさんの、我家わがやの、いつもの細工場こまばた  
 になつて、それがただ白しろい細工場こまばたで、白しろい神棚かみだが見みえて、白しろい細  
 工盤しぎが据すつて、それで、白しろい塚つかが、細工盤こまばたと角かくを取とつた長火鉢ながひばちだ  
 つたんですつて。」

多津吉たなそこは掌てのひらを強つよく目めを払はつて、熟じつと視みる。

「ですから、火かも皆みな白しろいんです。鉄瓶てつびんもやっぱり白しろい。——その

下に、焚たいてありました松の枝が、煙も立たずに白い炎で、小さなまんじ卍まんじに燃えていて、そこに、ただ御新造の黒髪ばかり、お顔ばかり、お姿ばかり、お顔はもとより、衣紋えもんも、肩も、袖も、膝も真まつしろ  
白な……幽霊さん……」

「ああ。」

「ね、ただ、お髪ぐしの円鬘まげの青い手絡てがらばかり、天と山との間へ、青い星が宿ったように、晃きら々と光きらって見えたんですって。

ああ、貴方、お拝みなさるの。

私も拝みたい。」

「ちよつと！……塚の前で、さしむかって、私と並ぶと、きみが、そのまま、白くなって消えそうあぶなで危あぶなつかしい。しばらく、もう、

しばらく。」

と息いき忙ぜわしい。

「ええ、そうね。この振袖を、その方のおかたみかも知れないなぞと、自惚うぬぼれているうちは可いいけれど、そこへ寄つて、そのお姿と並んでは、消えてしまふもおなじですわね。ちよつと、ここからお拝み申して……」

と、腰をすらりと掌てを合わせた。

「御免遊ばせ、勝手にうわさお風説なんかして。」

と、膝を折りつつ低く居て、片手に松葉を拾う時、簪かんざしを鬢しびんに挿すのであつた。

多津吉は向直つて、

「それから。」

「まあ、その銅壺どうこに、ちゃんとお銚子ちょうしがついているんじやありませんか。踊のお師匠さんだつたといひますから、お銚子をお持ちごようすの御容子も嬉しい事。——近常さんは、娑婆しやばも苦患くげんも忘れてしまつて、ありしむかしは、夜延よなべ仕事のあとといへば、そうやつて、お若い御新造さんのお酌で、いつも一杯の時の心持で。……どんなお酒だつたでしょうね、熱い甘露でしょう、……二三杯あがつたと思つと、凍つた骨、枯れた筋にも、一いっとき齊せいに、くらくらと血が湧わいて、積つた雪を引ひかけた蒲団ふとんの氣で、大胡坐おおあぐら。……（運八が銀の鶏……ではあれども、職人頭がしらは兄弟分、……まず出来た。この形。）と雪を、あの一ひとかたまり塊かたまり……鳥冠とさかを捻ひねり、頸くびを据え、翼

を形かたどり、尾を扱しごいて、丹念に、でも、あらづもりの形を。——  
 それを、おなじ雪の根の松の下へお置きなされると、鑿たがねはほんとう  
 のを懐ふところ中から、鉄かなづち鎚を取って、御新造さんと熟じっと顔を見合っ  
 て、（目はこう入れたわ。）丁とん！（左は）丁ちようと打込む冴さえに、あり  
 ありとお美しい御新造さんの鬢びんのほつれをかけて、雪の羽がさら  
 さらと動いて、散って、翼を両方へ羽搏はたくと思うと、——けけこ  
 ツこう——鶏の声がしたんですって。」

二人思わず、しかし言合わしたごとく、同時に塚の枯草の鳥冠  
 を視みた。日影は枯芝の根を染めながら、目近き霧のうら枯がれを渡る  
 のが、朦朧もうろうと、玉子形なりの鶏を包んで、二羽に円光の幻を掛けた。  
 「——そう言つて、幾たびも、近常さんは臨終いまわの際に、お年より

をはじめ、氣を許した人たちに、夢現うつつのように……あの霜の尖とがつたような顔にも、莞爾にっこりしてはお話しなすつたそうですがね——

その何ですととき、鶏の聲が、谷々へ響いて、ずつと城下へ拡ひろがると一所に、山々峰々の雪が颯さつと薄い紫に見えたんですって、夜よが白みましたの。ああ、御新造さんの面影はもう見えません。近常さんは、はつと涙をお流しなすつたそうですが、もうただ悲しいばかりの涙じゃありません。可なつかし懐い、恋しい、嬉しい、それに強さ、勇ましさもまじったのです。どうしてって言えばね、雪をつかねた鶏の烏冠が、ほんのりと桃色そまに染りましたって、日の昇り際の、峰から雲に射さす影が映って彩さつたんです。

濃い紫に光るのは、お月様の御堂の棟。



——その頃は、こんな山の、荒れた祠ほこらですもの。お住持はなくて、ひとりものの親仁おっさまが堂守をしていましたそうです。降りつづいた朝ぼらけでしょう。雀わなじやアありません。いろ鳥のいろいろに、稗粟ひえあわを一つかみ、縁へ、供養、と思つて、出て、雪をかついで雪折れのした松の枝かと思う、倒れている人間の形かたを見つけて、吃驚びっくりして、さらさらと刻んで飛ぶと、いつもお参りをかかしなさらない、顔馴染かおなじみの近常さん。抱いて戻つて、介抱をしたあとを、里へ……人橋かけるじゃあなし、山男そつくりの力ですから、裸おんぶであつたためながら、家うちへお送りはしたそうです。すが、それがもとお亡くなりは、どうもぜひない事でしたわね。

……ああ、また聞こえました、その時の鶏れんげの声。……夜の蓮華

の白いのの、いま真まつさお青な、麓ふもとの川波を綾あやに渡つて、鼓の緒さばを捌さばくように響いて。

峰の白雪……私が云うと、ひな唄のようでも、莊おご嚴そかな旭あさひでしょう。月の御堂の桂かつらの棟。そのお話の、真まん中なかへ立つて、こうした私は極きまりが悪い……」

と、袖を合わせた肩細く、

「御覧なさい、その近常さんは、その真まん中なかへ、両手をついて、お日様、お月様に礼拝をしたんですって——そして、取つて、塚にのせた雪の鶏に、——お名を……銘を……」

ふと、ふつくりするまで、瞼まぶたに気を籠め、傾いて打案さまずる状さまで、

「姓がおあんなすったんですがね……近常さん。」

「勿論、それは、ここで、きみが天狗から聞いたんだね。」

「はあ。」

「あいにく、いまだ石碑がない。」

と、袖も寂しそうに塚に添い、葉を擦さすった。

「名のりは、きみが幾たびも言ってくれたので、まざまざと、その顔も容ようす子も、眉毛まで見えるように思われてならないよ。」

「どうして思出せないんでしょう。いいえね、あの、近常さんの方は、——一字、私の名が入っていたので、余り覚えよかつたもんですから……」

「ああ、お近さん。」

「常で沢山。……近目のようで可厭いやですわ、殿方と違えますもの

——貴方は？」

「いや、それがね、申しおくれた処へ、今のような真剣の話の中へは、……やくざ過ぎて、言憎い。が、まあ、更あらためて挨拶しよう。——話をして、それから、その天狗はどうしたね。」

「この山は、どういうものか、雑木林なり、草の中なり、谷陰なり、男がただひとりで居ると、優しい、朗かな声がしたり、衣摺きぬずれが聞こえたり、どこからともなく、女が出て来る。円鬚まるまげもあるうし、島田もあろうし、桃の枝を提げたのも、藤山吹を手折ったのも、また草籠くさかごを背負しよったのも、茸きのこ狩がりの姉ねえさんかぶりも、それは種々さまざま、時々だというけれど、いつも声がして、近づいて

姿が見える——とそういうのが、近国にも響いた名所だ。町に別  
 嬪つびんが多くて、山遊びが好すきな土地柄だろう。果して寝転んでいて、  
 振袖を生捉いけどった。……場所をかえて、もう二三人捉つかまえよう。——  
 （旅のものだ、いつでもというわけには行かない。夜を掛けても  
 女を稼うごう。）——厚かましいわ。蟒うわばみに吞くまれたそうに、  
 頭まをさきへ振まつて、ひよろひよろ丘の奥へ入りました。」

「ただものでない、はてな。」

多津吉は確しかと腕こまぬを拱こまぬいた。

「何しろ、これは、今の話の様子だと、——故人たがねが鑿たがねで刻んだと  
 いう、雪をつかんだ鶏の烏冠ひに、旭ひのさしたのを象徴かたどったものだ。  
 緋葉もみじもなお濃い。……不思議なもののような気がする。ただの白

い饅頭では断じてない。はてな。」

と、のぼして触れようとした手を、膝こぶしに拳して、固くなつて控えた。

「天狗が気になる。うっかり触ると消えはしないか。」

「消えれば口の中ですわ。……祝儀をくれない天狗なんか。」

姉さん、ここはばらがきで、

「私にやろう……と云つたんですもの。ほんとうの天狗の雛ひよツ子だつて。」

また奇妙に、片袖をポンと肩に掛けて、多津吉の眉の前へ、白い腕あらかわを露呈に、衝つとかがみ腰に手を伸ばして、ばさりと巢を探るいたずら悪戯いたずらのように——指を伏せても埒らちあく処を——両手に一つずつ

饅頭を、しかし活いきもののごとくふわりと軽く取った。

立直った時である。

「あらあら火事が。」

多津吉もすつくと身を起した。

「また火事か！——いや、火事じゃない。あれは、あすこに、大きな坊さんの銅像がある。それに夕日が当るんだよ。」

月の御堂のあとという、一むらの樹立、しかも次第高なれば、その梢こずえにかくれたのが、もみじを掛けた袈裟けさならず、緋ひの法衣ころものごとくかッと立った。

水平線上は一脈金こんじき色である。朱に溶けたその波を、火の鳥のように直線に飛んで、真まおもて面に銅像を射たのであった。

しばらくして、男女は、台石の巖いわともに二丈六尺と称するその大銅像の下を、一寸ぐらゐに歩行あるしていた。あわれに小さい。が、松もみぢと緋葉もみぢの中なれば、さすらう渠等かれらも恵まれて、足許あしもとの影は駒こまを横よこえ、裳もすその蹴出けだしは霧に乗つて、対ついの狩衣かりぎぬの風情があつた。

——前刻さつき、多津吉のつれの女が、外套がいとうを抱えたまま振返つて、上を仰いだ処は、大造りな手水鉢ちようずばちを境にして、なお一つ展ひらけた原の方なのである。——

振袖ほがらかが朗な声して、

「まあ、貴方、なぜおじぎをなさらないの。さつきは、法界屋にも、丁寧ていねいに御挨拶ごあいさつをなすつたのに、貴いお上人さんの前にさ——」



「おちかさん。」

多津吉は、盥たらひのごとき鉄鉢を片手に、片手を雲に印いんぞう象ぞうした、銅像の大きな顔の、でつぶりした頤あごの真ま下したに、屹きつと瞳あを昂あげて言つた。

「……これは、美術閣の柴山運八と、その子の運五郎とが鑄くたんだよ。」

波な頭みがしら、雲なの層かさな、累れんげる蓮華かたどか、象かたど徴とつた台座いの巖いわを見定めひまる隙ひまもなしに、声とともに羽織ひまの襟えりを払はつて、ずかと銅像ひまの足あしの爪つめを、烏くちばしの嘴くちばしのごとく上のぞから覗のぞかせて、真ま背うしろ向むかひに腰こしを掛かけた。

「姓こおりは郡こおりです……職人近常のぞの……私はその倅せがれの多津吉たつきちというんだよ。」

「ああ多津吉さん。」

その肩を並べて、莞爾にっこりして並んで掛け、

「まあ、嬉しい……御自分で名を言つて下すつたのは、私の占うらな筈いが当たつたより嬉しいわ。そうして占筈は当りました。この大坊主つたら、一体誰なんです。」

と肩を一層、男に落して、四斗樽しとだるほどの大首を斜めに仰ぐ。：

：俗に四斗樽うわばみというのは蟒うわばみの頭の形容である。濫みだりに他の物象に向つて、特に銅像に対して使用すべきではない。が、鑄たものが運八父子おやこで、多津吉の名が知れると、法界屋の娘の言葉も、お上人様が坊主になつた。

「……橋の上、大通りの辻……高台の見霽みはらしと、一々数えないで

も、城下一帯、この銅像の見えることは、ここから、町を見下ろすとおんなじで……またその位置を撰んで据えたのだそうだから、土地の人は御来迎ごらいこう、御来迎と云うんだね。高山の大霧に、三丈、五丈に人の影の映るのが大仏になって見えるというのにたとえてだよ。勿論、運八父子は、一度聞けば誰も知らぬものない、昔の大上人としてこれを鑄たんだ。——不思議に、きみはまだ知らないようだけれど、五つ七つの小児こどもに聞いても、誰も知らぬものはなからうね。」

「蓮如れんによさん、」

「さあ、」

「親鸞しんらん上人。」

「さあ、」

「弘法大師。」

「さあ、それが誰だつて、何だつて、私は失礼をする気は決してないんだ。ただ運八父子の手に成つた……」

「勿論ですわ。——法界屋にお辞儀をなすつた方が、この木菟入道（ゆうどう）に……」

おお、今度は木菟入道。

「挨拶をなさらないのは。——あなた、私ね、前刻（さつき）通りがかりに、一度拝んだんですよ。御利益はちつともない。ほほほ、誰がこの下で法界屋を唄わせたり、（は）刎（は）ねさせたりするものがありますか。そんな事より、ただ大きな、立派なもの……もつとも、むくみが

来て、ちつとうだばれてはいますがね。」

脊筋を捻<sup>ね</sup>じて、台座に掛けた秋の蝶の指の細さ。

「御覧なさい。余計な耳を押立て<sup>おった</sup>てて、垂頬<sup>たれほ</sup>で、ぶよぶよツちやアありやしない。……でも場所が場所だし、目に着くことといったら、国一番この通りですからね。——この鶏<sup>とり</sup>を。」

……包みもしないで——翠<sup>みどり</sup>を透かして、松原の下り道は夕霧になお近いから——懐<sup>ふところ</sup>紙<sup>がみ</sup>に乗せたまま、雛菓子<sup>ひながし</sup>のように片手に据えた。

「あなた、折角、私がおさがりを頂いたんですからね、あの塚から、」

その古塚は、あわれ、雪に埋<sup>うも</sup>れた名工と、鼓の緒の幻<sup>かげろう</sup>の陽炎

に消えた美女のおくつきである。

「二羽巢立をして、空へ翔かけるように、波ですか、雲ですか、こへ備そなえようと思つて持つて来たんですけれどもね、——ふふんだ、誰が、誰が……」

頸うなじを白く、銅像に前髪をバラリと振つた。下唇の揺れるような、鳥冠とさかの緋葉もみじを、一葉ひとはぬいて、その黒髪に挿したと思うと、

「ああ、おいしい。」

早い事。

「なかなか、おいしい。天狗の雛ひよっこ児。——あなたも一つめしあがれ。」

「……………」

「あら、卑怯だことね、お毒味は済んでるのに。」

と、あとののに、いきなりまた皓齒を当てると、

「半分を、半分を、そのまま、口から。」

と、たとえば地藏様の前に地獄の絵の生首を並べた状に、頸を引抱えた、多津吉の手を、ちよつと遁げて、背いて捻った女の唇から、たらたらと血が溢れた。

一種の変相と同じである。

「や、中毒ったか。」

と頬に頬をのしかかつて、

「毒でも構わん、一所に食べよう。」

「あいつつ。」

と、眉を顰めた。松葉が睫毛に掛つたように。

「噛みはしない、噛んだか。いや噛んだかも知れない。きみに詫

びる。謝罪する。……失礼だがきみの、身分を思つて……生半

可の横啣えで、償いの多少に依りさえすればこんな事はきつ

と出来ると……二度目にあの塚へ、きみが姿を見せた時から、そ

う思つた。悪心でそう思つた。——ここへ連れて来て、銅像の鼻

前で、きみの唇を買つて、精進坊主を軽蔑してやろうと思つ

たんだ。慈悲にも忍辱にも、目の前で、この光景を視せられて、

侮辱を感じないものは断じてないから。——うむ、そうだ。坊主

を軽蔑する本心にも手段にも、いささかもかわりはない。が、き

みに対して、今は誓つて悪心でない、真心だ。真実だ。許してく



れ。そして軽蔑さしてくれ。」

「はなして……よ。」

しかも、打うち睡つつぶるばかりの双まぶたの瞼まぶたは、細く長く、たちまち葉研やげんのようになつて、一点の黒き瞳こうこつが恍惚こうこつと流れた。その艶えん麗れいなる面おもての大きさは銅像の首と相あい齊ひとしい。男の顔も相あい齊ひとしい。大悪相おしこを顕あじたのである。従つて女の口を洩もるる点々の血も、彼かしこ処こにみたらし手洗水あらいに湧わく水脈みづに響あいて、緋葉もみじをそそぐ滝であつた。

「あ。」

「痛い、刺さつて、」

「や、刺とげか。」

獣けだものの顔は離れた。が、女の影は鳥のように地に動いて、裾すそは尾

を細く、すつと緊まる。

「何でしよう。」

衝と懐紙に取つたを見よ。

「あら、大きな針……まあ釘よ。……」

「釘？」

と、多津吉は眉を寄せつつ、かえつて忘れてでもいるような女の子から、その疵つけたものを撮み取つて凝と視ると、視るうちに、わなわなと指が震えた。

「父親おやしの鑿たがねだ。」

「ええ、近常さんの……」

「見てくれたまえ——この尖さきへ、きみの口の裡なかの血がついて。」

絹糸の纏れの紅いのを、衝と吸う端に持ちかえた。が、

「もとの処に、これ、細い葉を二筋と、五弁の小さな花が彫つてある。……父親は法華宗のかたまり家だったが、仕事には、天満宮を信心して、年を取つても、月々の二十五日には、きつと一日断食していた。梅の紋を、そのままは勿体ないという遠慮から、高山に咲く……この山にも時には見つかる、梅鉢草なんだよ。この印は。——もつとも、一心を籠めた大切な鏝にだけ記したのだから。——これは、きみの口から聞かしてくれた……無論私も知っている……運八のために、その一期の無念の時、白い幽霊に暖められながら、雪を掴んで鶏の目を彫込んで、暁に息が凍った。その時のものかも知れないと……知れないと、私は、私は思うん

だ。」

「違いありませんよ、きつと、きつとそうに。——ですもの、活きてるような白い饅頭が、それも、あとの一つの方は、口へ入れると、ひなひなと血が流れるように動いたんですの。……天狗のなす業わざだわね。お父さんのその鑿うで、どうしたら可いでしょう、私こわしいわ。何ですか、震えて来た。ぞくぞくして。」

「笑つてくれたもうなよ、私には一人の父親おやじだ。」  
鑿うをば押頂おしき、確しかと懐ふところ中に挿さ入れた。

「風来もので、だらしはないがね、職人の子だから腹巻はらまきを緊しめて  
いる。」

と突入れつつも肩かたが聳そびえ、

「まったく、ぞくぞくもしよう、寒気もしよう、胸も悪かろう、唇も汚きたならしかろう。堪忍してくれたまえ。……そのかわり、今ね、憤おこるなよ……お転婆な、きみが嬉しがる、ぐつとつかえが下つて胸の透く事をしてお目に掛ける。――

そこいらの連中も、よく見ておけ。」

と、なだらに下る山の端はに瞳を向けた。が、行きつれ、立ち交る人影は、みなおり口の阪へ行く。……薄き海の光の末に、鳥の立迷う風情であつた。

「ちかさん、父親おやじを鼻ひいき根の盲人めくらにさえ、土地に、やくざものに見離された……この故郷へ、何のために帰るものか。」

意気は独り激しそうだ。が、する事はだらしがない。外套は着

ていなかつた。羽織を捌さばいた胸さがりの角帯に結び添こいねえ、希ねがわくは道中師の、上は三尺ともいふべき処を、薄汚れた紺めりんすの風呂敷づつみを、それでも緊しかと結んだと見えて、手まさぐると……

「解いてあげましょうか。」

「いや、大丈夫。……きみたちは知るまいなあ。——むかしこいららで、小学校へ通うのに、いまのように洒落しやれた舶来ものは影もないから、石盤、手習草紙という処を一絡ひとまとめにして……武者修行然として、肩から斜はすっかけ、そいつはまだ可いいがね、追々寒さに向つて羽織を着るようになるよこの態てい裁さいです。——しかし膚はだに着けるにはこれが一等だ。震災以後は、東京じゃ臆病な女連は今でも遣つてる。」

と云つて、膝の上で、腰弁当のような風呂敷を、開く、と見れば——ちようピストル一挺の拳銃。

晃然と霜柱のごとく光つて、銃には殺氣紫に、つぼ蒼める青い竜胆うよそおいの装を凝らした。筆者は、これを記すのに張合がない。なぜというに、とつさピストル咄嗟に拳銃を引出すのは、最新流行の服の衣兜かくしで、これを扱うものは、世界的の名探偵か、きようぞく兇賊かでなければならぬ。……但し、名探偵か、兇賊でさえあれば、それが女性でも差支えのない事は註に及ばぬ。

風呂敷には、もうひとしな一品——てかがみ小さな袖姿見があつた。もつとも八つ花形でもなければ、りゆうじやくよそおい柳鵲かがみの装があるのでない。ひとえ単に、円形の姿見である。

おんな  
 婦も、ちつと張合のないように、さし覗のぞき、両かの腕いなを白々と膝  
 に頬杖しかかした。高島田の空に、夕立雲の蔽おほえるがごとく、銅像の覆の  
 掛しかかった事は云うまでもない。

「……玩弄おもちゃ品？」

「怪けしからんことを——由緒は正しく、深く、暗く、むしろ恐る  
 べきほどのものだよ。」

と、片手に撓ためて、袖に載せた拳銃ピストルは、更に、抽取ぬきとった、血  
 のままなる狼おおかみの牙きばのように見えた。

「銅像の目を射るんだ——ちかさん。」

「あら、」

思わず軽く手を拍たたくと、衝つと寄せた、刻んだような美しい鼻を、



男の肩に、ひたと着けて、

「いいわねえ、賛成。……上手に射てますか。」

その口くちぶり振は、ややこの器うつわに馴なれたものようでもある。

「信ずるんだ。腕じゃあない、この拳銃ピストルを信ずるんだよ。——

聞きたまえ、ここにこの銅像を除幕してから、ほとんど十年にな

る。これが各国に知れた頃から、私は目を射る事を、遥はるかにまた遠

く心掛けた。しかし、田舎まわりの新聞記者の下端したっぱじゃあ、記

事で、この銅像を礼讃することを、——口惜くやしいじゃあないか——

余儀なくされるばかりで。……射的バットで蝙蝠バットを落す事さえ容易たやすくは

出来ないんです。

おなじく、地方を渡り歩行あるくうちに、——去年の秋だ。四国土

佐の高知の町でね……ああ、遠い……遥々はるばるとして思われるなあ

「

海に向つて、胸を伸ばすと、影か、——波か、雲か、その台座の巖いわおを走る。

「南京出刃打なんきんでぼうちの見世物みせものが、奇術にまじつて、劇場に掛かつたんだ

よ。まともには見られないような、白い、西洋の婦人おんなの裸身が、

戸板へ両腕を長く張つて、脚を揃かすがいえて、これも銃かすがいで留めてある。

……絵で見るような、いや、看板だから絵には違ちがひない……長剣

を帯びて、緋羅紗ひらしやを羽被はおつた、帽子もお約束の土耳其人トルコが、出刃

じゃない、拳銃ピストルで撃うつているんだ。

この看板を視みて立つたと云うのさえ、しみたれた了りようけん簡けんをさ

らけ出すようで、きみの前で言うのもお恥かしいがね、……さいわい夜だ、大して満員でもなさそうだから切符を買った。が、目的はただ一つなんだからね、（拳銃<sup>ピストル</sup>はまだかね、）と札口で聞いたが、（え、）と札売の娘は解<sup>わか</sup>りかねる。（南京の出刃打は、）とうっかり言つて、（お目当はこれからですよ。）には顔から火が出た。いま、きみに対しても汗が出る。

——悪くまた二階の正面に連れられて、いわゆるそのお目当を見たんだが、悉<sup>くわ</sup>しくは云うにも及ばないけれど、……若いお嬢さんさ、その色の白いお嬢さん——恩人だし、仙女、魔女と思うから、お嬢さんと言うんです。看板で見たようなものじゃあない。上品で、気高いくらいでね。玉とも雪とも、しかもその乳、腹、

腰あらわの露呈あらわなことはまた看板以上、西洋人だし、地方のことだから、  
 取とりしまり締ゆるやも自然寛ゆるやかなんだろう。……暗い舞台に浮出して、まっ  
 たく、大理石に血の通うと云うのだね。——肩、両眼、腰、足の  
 先と、膚はだなりに、土耳其人トルコが狙ねらって縫打ぬいに打つんだが、弾丸たまの煙  
 が、颯さつ、颯と、薄絹を掛けて、肉線を絡まとうごとに、うつくしい顔  
 は、ただ彫像のようでありながら、乳に手首に脈を打つ。——見  
 てはいられない処を、あからめもせずみまも瞻みまもつたのは、土耳其の……  
 口上が名のつた何とかパシヤの拳銃ピストルの、その鮮あざやかな手錬あざやなんで  
 す。繕つくつて言うのじゃあないが、それを見るのが目的だった。も  
 う一度、以前、日比谷の興行で綺麗な鸚鵡おうむが引金を口で切つて、  
 黄薔薇きばらの蕊しべを射て当てて、花卉を円く輪に散らしたのを見て覚え

ている。——扱てい人は、たしか葡ポルトガ萄ル牙人であつたと思う。

いなか記者の新聞摺ずれで、そこはずうずうしい、まず取柄です。

——土耳古人にお鮎すしもおかしい、が、ビスケットでもあるまいから、煎餅せんべいなりと、で、心づけをして置いて、……はねると直ぐに楽屋で会つた。

私はいきなり跪ひざまずいたよ。むこうが椅子でも、居所は破やれだ置たみで

す。……こう云うと軽薄らしいが、まつたくの処……一生懸命で、

土間でも床でも構う氣じやなかつた。拳銃ピストル皆伝の一軸、極意の

巻ものを一気に頂こうという、むかしもの語りの術讓りの処だか

ら。私から見れば黄石公——壁に脱いだ、緋ひの外がい套とうは……その

まま、大天狗の僧正坊……」

多津吉は銅像の腰を透かして、背後うしろに迫つて、次第に暮れかかる山の寂せきばく寞さを左右に視みたが、

「燕尾服えんびふくの口上が、土地の新聞社という処で、相当にあしらつてくれる。これが通訳で。……早い処……切に志を陳のべたんだ。

けれども、笑つてばかりいて、てんで受けません。また土耳其人のこういう半狂氣はんきちがひに対する笑い方といったら、一種特別不思議でね、第一大な鼻おおきの鼻筋の、笑わらい皺じわというものが、何とも言えない。五百羅漢ごひやくらかんの中にも似たらしい形はない。象の小父さんが、嚏くさめをしたようで、えぐいよ。

鼻で巻いて、投出されて、怪飛けしとんでその夜は帰つた。……しかし、気心の知れた丑うしの時参詣ときまいりでさえ、牛の背を跨またぎ、毒蛇あぶこの顎を

潜くぐらなければならぬと云うんです。翌晩ひざまずまた跪ひざまずいた。が、今度は、おなじ象の鼻で、反対に、背うしろむき向むきに刎はねられたんだね、土耳古人は向うむきになって、どしどし楽屋を出ちまったよ。刎ねられ方は簡単だけれど、今度は昨夜ゆうべより落胆がっかりした。——実はうっかり言うまいと思つたけれど、そうもしたらばと、よもやに引かされ、その拳銃の極意を授けられたい、狙う目的と、その趣意を、父の無念ばらしの復讐のために銅像の目を狙うことを打明けたんだから——だ。が、何にもならない。

興行は五日間——皆通つた。……もう三度めからは会つてもくれない、寄附よせつけません。しかも、打方を見るだけでも、いくらか門前の小僧だ、と思つて、目も離さずに見たんだが、この目の色

は、外国人が見ても、輪を掛けて違っていたに相違ない、少々血迷つてる形です。――

楽らくの晩だ。板いた礫はりつけの、あともう一場、賑にぎやかな舞踏がある。――

――帷まく幕が下りると、……燕尾服の口上じやない――薄汚い、黒の皺だらけの、わざと坊さんの法衣ころもを着た、印度人インドが来て、袖を曳ひいて、指ゆび示さしをしながら、揚幕へ連れ込んで、穴段を踏んで、あの奈落……きみもよく知つていようが、別いなして地方劇場なかしばいの奈落だ

よ。土地柄でも分る、犬神の巢の魔窟だと思えば可い。十年人の棲すまない妖怪邸ばけものやしきの天井裏にも、ちよつとあるまいと思う陰惨

とした、どん底に――何と、一体白身の女神、別嬪べっぴんの姉さんが、舞台の礫の時より、研いだようになお冴えて、唇ひももに緋桃を含んで



立っていた。

つもつても知れる……世界を流れ渡る、この遍路芸人も、楽屋風呂はどうしても可厭だと云つて、折たたみの風呂を持参で、奈落で、沐浴をするんだそうだっけ。血の池の行水だね、しかし白蓮華は丈高い。

すらりと目を晒して、滑かに伸ばす手の方へ、印度人がかくれ  
ると、（お前さんに拳銃を上げましょう。）とこう言うんだ。  
少しは分る。私だつて少々は嘯る。——土耳其の鼻を舐めた奴だ、  
白百合二朶の花筒へ顔を突込んで、仔細なく、跪いた。——ただ  
し、上げましょう拳銃を——と言う意味は——打方を教えよう——  
——だとばかり思ったのに、乳の下の藤色のタオルのまま、引寄せ

た椅子の仮衣かりぎの中で、手提てさげをパチリとあけて……品二つ——一度取上げて目で撓ためて——この目が黒い、髪が水々とまた黒い——そして私の手に渡すのが、紫水晶こうがいの筭がと、大真珠かんざしの簪かんざしを髪からぬき取ったようだった。……

——ちかさん、この、袖姿てかがみ見と拳銃なんだよ。」

女は息を引いて頷うなずいた。

男が、島田の笄はねもとゆい元結むすびめの結目おさを压おさえた。

「ここを狙え、と教えたんだ。」

「あ。」

「御免よ。うつかり……」

「ああ、元結が切れそうだった。可厭いやね、力を入れてさ。」

と邪慳じゃけんに云つて優しく視みた。

「土耳其人が、頤あご、咽喉のどした下から、肩、順々に——最後に両方の耳の根を打つ。最々後に、絶対の危険を冒す全世界の放れ業だ、とおびや怯かして、裸身の犠牲の脳頭のうてんを狙う時は、必ず、うしろ向きになるんだよ。うしろ向きになって、的の姉さんを袖姿見てかがみに映して狙いながら、銃つづぐち口を、ズツと軽く柔やわらかに肩に極きめて、そのうしろむき曲打にズドンと遣るんだ。いや、肝を冷す。（教えよう）——お嬢さんが、私にその通りに遣れ、と云うんだ。（少し離れて、もう少し、立った爪尖まで、全身がはつきり映るまで、）とさしずをされて、さあ……一間半、二間足らず離れたらうか。——牛馬の骨皮を、じとじと踏むような奈落の床を。——裸の姿に

——しかも素馨そけいの香に包まれて。

——きみの前だが、その時々オルも棄てたから一糸も掛けない、  
浴ゆあがり後の立姿だ。……私はうしろ向きさ。（拳銃ピストルを肩あてに当よ、）

と言う、（打とうと思う目をお狙い……）と云う、口が苦いまで、  
肝を嚙かんで、熟じつと視みたが、わなわなと震えて、あつと言つて振向  
いた。屹きつとなつて、（教えません、そんな事では——不可いけません  
、）と言われたが。蛇です、蛇です、蛇です、三足びき。一尺ぐらい  
ずつ、おなじほどの距離をおいて、蜘蛛くもの巣と、どくだみの、石  
垣の穴と穴から、によりりと鎌首を揃えたのが、姉さんの白い腰  
に、舌をめらめらと吐いているんじゃないか。——歴ありあり々と袖て  
姿見かがみに映つたんだ。

心もち肩を落して、乳房を抱いたが——澄ましてね、これらの蛇は出て来るんじゃない。遁にげて引込ひっこむんだから心配はない。

——智慧で占つたのではない事実だ、と云うんだ。湯を運ぶ印度人が、可おそろし恐く蛇ずきの悪いたずら戯で、秋寂あきさびた冷気に珍らしい湯のぬくもりを心地よげに出て来る蛇を、一度に押えてせつちようして、遁ひきげ込む石垣の尾を二足も三足も、引ひき掴つかみ、引ひき掴つかみ、ぬき出しは出来なかつたが、断ちぎれたら食くいかねない勢いきおいで、曳ひっぱ張り曳ひっぱ張りしたもんだから、三日めあたりから——蛇は恂りこう巧で——湯のまわりにのたつていて、人を見て遁ひきげるのに尾の方を前さきへ入れて、頭を段々に引込ひっこめる。（世のはじめから蛇は智慧者ですよ。）と云う。まったく、少うろこしずつ鱗が縮んでぬるぬると引込んで、鼠の鼻ツさ

きが挟はさまったようになって消えたがね。奴等の、あの可厭いやらしい目だの、舌の色が見えるほど、球一つ……お嬢さんは電燈を驕おごっていてくれたんだ——が、その光さえ、雷いなびかり光か、流星のように見えたのも奈落のせいです。

遣やりなお直して肝を嚙かんだ。——（この睜みはった目が、袖姿見の裡うちの

この睜まばたった目が、瞬まばたいたと思う、その瞬間を射るんです。）同じようにして、うしろ向きに凝視みつめていれば、瞬まばたくと思う感じがその銅像の場合にも顕あらわれる。魔の睫毛まつげひとすじ一毫の秒まがきつとある。

そこを射よ、きつと命中あたる！ 私も世界を廻るうちに、魔の睫毛一毫の秒まに、拙へたな基キリスト督の像の目を三度射た、（ほほほ、）と笑つて、（腹切、浅野、内蔵之助くららのすけ——仇かたきうち討は……おお可厭いやだけ

れど、復讐しかえしは大好き——しっかりとその銅像の目をお打ちなさいよ。打つ礫つぶてあやまは過つてその身に返る事はあつても、弾丸たまは仕損じてもあなたを損いはしません。助太刀すけだちの志です。——上着を掛けながら、胸を寄せて、鳴キスをしてくれました。トタンに電燈を消したんです。（魔の睫毛一毫の秒でしたわね、）浪うおを行く魚なかと、中空くわを飛ぶ鳥に、なごりを惜おしむものではありません——流星は宇宙に留つても、人の目に触るるのはただ一度ですもの、と云つて、……別れました。

別れました。その姉さんには別れた、が、きみとは別れまいね。

と云つた、袖姿てかがみ見は男の胸に、拳銃ピストルは女の肩かかに掛つたのであ

る。

御手洗みたらしを前にして、やがて、並んで立った形は、法界屋が二人で屋台のおでん屋の暖簾のれんに立ったようである。じりじりと歩を刻んで、あたかもここに位置を得た。袖姿てかがみ見は、瞳のごとく背後うしろざまに巨なる銅像を吸った。拳銃ピストルは取直され、銃じゅうせん尖が肩から覗のぞいた……磨いた鉄鎚かなづちのように、銅像の右の目に向ったのである。

さすがに色をあらためて、

「気味が悪かろうとは、きみだから言わない——私が未熟だから、危いから、少し、そちらへ。」



「着ものを脱いで、的にも立ちかねないんですがね。」

と、自若として、ほほえみ微笑ながら、

「あなたの柄だと、私は矢取やどりの女のようにだよ。」

「馬鹿な事を——真剣だ。」

「あなた。」

と面かおを引ひき緊しめた。

「……………」

「一つは射うてますわね。……魔のお姫様の直伝ですから。……でも、音がするでしょう、拳銃ピストルは。お嬢さんが耶蘇ヤソの目を射た場所は、世界を掛けての事だから、野も山もちつとこことは違うようです。目の下が、すぐ町で、まだその辺に、人は散り切りませ

ん。天狗が一二枚もみじの葉を取ったって、すぐ山巡吏やままわりの監督

が出て来るんじゃないやアありませんか。——この静さしずかじゃ、音は城下

一杯こだまに飀こします。——私にその鑿たがねをお貸しなさいな。」

「鑿せめを。」兇悪をなすに、責せめを知つて、後事を托たくせよと云うがこ

とく聞えて、頷うなずいて渡した。

「拳銃ピストルをお見せなさいな。」

「……拳銃を。成程、引続けて二度狙うのは、自信がない、連発

だけれども、」

空くうを打たれて、手練てだれに得ものを落されたように——且つ器械を

検しらべようとする注意だと思つたように、ポカンと渡すと、引取る

が疾はやいか、ぞろりと紅くれないの褌つまを絞つて小褌をきりきりと引上げた。

落葉が舞った。颯つむじかぜ風に乗るように振袖はふつと浮いて衝と飛んで、台座に駆上ると見ると、男の目には、顔の白い翡翠かわせみが飛ぶ。ひらひらと銅像の襞ひだを踏んで、手がその肩に掛かつた時、前髪のもみじが、薄すすきんざしの簪を誘つて、中空に翻ひるがえるにつれて、はじめて、台座に揃えて脱いだ草履が山へ落ちた。

「あ、あ、あ、あんなものが、ああ、運五郎、倅せがれ、運五郎、山の銅像に天人が天降あまくだつた、天降つた。おお、あれは、あれは。やあ、大きな縞しまへび蛇だ。運五郎、運五郎。——いや、鳥だ、鳥だ。……青い、白い縞が、紅あかい羽もまじつた。やあ嘴くちばしで目をつつく。」

銅像が、城の天守と相對して以来、美術閣上の物干を、人は、

物見と風説うわさする。……男女の礼拝、稽首けいしゆするのを、運八美術閣翁は、白髪しらがの総髪そうがみに、ひだなしの袴はかまをいつもして、日和とさえ言え、もの見をした。馴なれて、近来はそうまでもなかつた処に、日の今日は、前刻城寄の町に小火ほやがあつて、煙をうかがいに出たのであるが、折こはるなぎから小春風こはるなぎの夕晴に、来迎の大上人の足もとに、ぬかのごとく人のゆききするのを、心地よげに、久しぶりに見み惚とれていた。もつともその間に、遊廓の窓だの、囲いものの小座敷だの、かねて照準を合わせた処を、夢中で覗のぞく事を忘れない。それにこの器きは、新式精銳のものでない。藩侯の宝物蔵にあつたという、由緒おおきづきの大な遠目金とおめがねを台つきで廻転させるのであるから、いたずらものを威嚇いかくするのは十分だが、慌あわただしく映るものは

——天女が——縞蛇に——化鳥けちように——

またたちまち……

「やあ、轆轤ろくろつくび首の女だ、運五郎。」

ドシンと天狗に投げられたように、翁おきなは物干に腰をついた。

島田の鬢びんの白い顔が、宙にかかり、口で銅像の耳を噛かんで踏ふみべ  
 へつまくれない返る棲の紅を、二丈六尺、高く釣りつつ、鑿たがねを右の目に当てて、  
 雪の腕かいなに、拳銃ピストルを、鉄鎚かなづちに取つて翳かざした。

銅像の左の目は、同じ様にして既に一撃を加えた後である。

まことや、魔の睫毛まつげ一毫ひとすじの秒まに、いま、右の目に鑿を丁と打  
 ったと思うと、

「キイー」

と声の糸を切つて、振袖は銅像の肩から、ずるずると<sup>すべ</sup>こり落ちた。あわや台座に留まろうとして、術<sup>わざ</sup>の施す隙なき状<sup>さま</sup>に、そのまま<sup>あおむ</sup>仰向けに<sup>たそがれ</sup>黄昏<sup>たそがれ</sup>の地に吸われたが、白脛<sup>しらはぎ</sup>を空に土を蹴<sup>け</sup>て、<sup>つま</sup>棲<sup>つま</sup>をかくして俯<sup>うつむ</sup>向けになつて倒れた。

読者の、もの狂<sup>くるわ</sup>しく運八翁が、物見から、弓矢で、あるいは銃で、射留めた、と想像さるるのを妨げない。弾丸<sup>たま</sup>のとどかない距離をまだ註してはいなかつたから。いわんや、翁は、旧藩の士族の出であるものを。

「——事実を言おう、口惜<sup>くちおし</sup>いが、目が光つたんだ。鑿<sup>つぶ</sup>で突き潰す

と、銅像の目が大きく開いて光ったんだ。……女は驚いて落ちこんだ。」

多津吉は、手足を力なく垂れた振袖を、横抱きに胸に引緊めて、御手洗の前に、ぐたりとして、蒼くなつて言つた。

銅像の肩から転落した女を、きつめの水に抱込んだのはほとんど本能的であつたといつて可い。しかし、鬢も崩れ、髪も濡れて、二人とも頭から水だらけになっているのは――

——「ベツ、此奴等、血のついた屑切なんか取散らかして、蛆虫め。——この霊地をどうする。」

自動車の助手に、松の枝を折らせ、掃立てさせた傍ら、柄杓

を取って、パツパツと水を打つついでに、頭ともいわず肩ともいわず、二人に浴びせかけたのは、銅像の製作家、東京がえりの長髪の運五郎氏で、閣翁運八とともに、自動車で駆上つて来た事は更めて言うに及ぶまい。事実あらたに逢ほうちやく着すると、着弾の距離と自動車の速力と大差のない事になる。自動車の方が便利である。

侮辱と唾棄だきの表現のために、匆はね掛けられた柄杓の水さえ救すくいの露しろうそうのしたたるか、と多津吉は今いのちは恋人の生命を求むるのに急で、焦ちかめ燥せがれの極てい、放心ふらんしんの体ていであるのであつたが。

「近視ちかめの俸せがれが遣りふらちそうふらちな事だわい。不埒ふらちものめが。……その女は、そりや何だ。」

袴腰はかまこしに両腕を張のぞきこつて覗のぞきこ込こむ、運八翁うんぱうに、再びあおじろ蒼あお白しろい顔を振



上げた。

「門附芸人です、僕の女房です。」

「う、う、おお、似合うたな、おなじように。」

「ああ、お父さん——郡は拳銃ピストルを持っていますから。」

少し離れて半円を廻わして、遊山がえりの——自動車より前に  
駆集むれった群が、間近くも寄らないのは、銅像に攀よじた魔の振袖の  
はじめから、何となきこの拳銃の影であつた。

集つどえる衆の肩背すきの透に、霊地の口に、自動車が見えて、巨像の  
腹の鳴るがごとく、時々、ぐわツぐわツと自己の存在と生活を叫  
んでいる。

この時しも、軽装した助手は、人の輪の前をぐるりぐるりと柄

杓を上下に振って廻った。

「ピストル拳銃を……拳銃を……」

他を打てか、自らを殺せか——呼吸の下で、幽かすかに震えた、女は、まだ全く死んではないのである。

「危い、お父さん。——早く警察へ。」

「何をし得るものだ。——いや、時にいずれも、立合わるる、いずれも。」

運八翁は、ずかずかと横歩よこある行きに輪の真中へ立って、

「俺と倅の、この製作の名誉を嫉ねたんで。」

「そうですそうです。」

運五郎氏も、並んで、細い杖ステッキを高らかに振った。

「大銅像の目を傷けたんだね、両眼を——潰すと齊しく靈像の目が生きて光つて開いた、虫の投落されたのをよく視て下さい。」

「柴山運八。」

「運五郎、苦心の製作に対して。」

と云つた。

「あはッ、はッ、はッ、はッ、はッ。」

と笑つたものがある。この時、銅像が赤面した。一朵の珊瑚

島のごとく水平線上に浮いた夕日の雲が反射したのである。肩

まで霧に包まれたその足と、台座の間に、ちよぼりと半面を蟋

蟀のごとく覗かせて見ていた、埃だらけの黒服の親仁が、ひよ

いと出た、妙な処に。——もつとも、この山のかかる時には、砲

台形に並んだ丘の上をはじめ、少し脊の高い松のどの樹にも、天狗が居て、翼を合せ鼻を並べて見物する。親仁は、てくてくと歩み寄ると、閣翁父子の背後へ、就中、翁の尻へ、いきなり服の尻をおツつけるがごとくにして、背合せに立った。すなわち銅像に対したのである。

一人やなんぞ、気にもしないで、父子は澄まして、衆の我に対する表敬の動揺を待って、傲然としていた。

黒服の親仁は、すつぽりと中山高を脱ぐ。兀頭で、太い頸に横皺がある。尻で、閣翁を突くがごとくにして、銅像に一拝すると、

「えへん。」

と咳しわぶぎ、がっしりした、脊せいひく低そりみの反身そりみで、仰いで、指を輪にし  
て目に当てたと見えたのは、柄つきの片目金、拡大鏡を当あてがった  
のである。

「は、は、は、違ちがう、違ちがう、まるで違ちがう。この大入道の団栗目どんぐりめ  
は、はじめ死んでおった。それが鑿たがねで活いきたのじゃ。すなわち潰  
されたために、開あいたのじゃ。」

「何。」

「あ、先生。」

と、運五郎氏がギクンと首を折った。

「柴山君、しばらくじゃ。」

「お父さん、お父さん、榊さかきばら原——俊明先生です。」

東京——(壺)——芸学校の教授にして、(式)——術院の委

員、審査員、として、げんぶせいりゆう玄武青竜はいざはいざ知らず、しかい斯界の虎！

はたその老齡の故に、びやっこ白虎となと称えらるる偉匠である。

おも惟うべし近常夫婦の塚に、手向けたる一いちねん捻ねんの白饅頭の活いける

がごとかりしを。しかのみならず、梅鉢草の印の鑿たがねを拾たつて、一條の奇蹟を鷄とりに授けたのを。

「ええ、ええ、大先生、倅がかねて……」

儀礼に、こだわりの過ぎるほど訓練のある、特に官職に対して謙屈な土地柄だから、閣翁は、衆に仰あおむ向けに反らしたちようど同じ角度に、その頤あごを臍へそに埋めて、手を垂れた。

「——間違うても構わんです。あんた方の銅像しゆんめに対する、俊

明いの鑑査はじゃね。」

古帽子で、ポンと膝頭たをたたいて、

「今の一言の通りです。」

おおやこは、太き息を通わせて、目を見合つた。

「せち辛い世の中ですので、鑑査の報酬を要求します。はっはっはつ。その料金としてじゃね、怪我人を病院へはし、自動車を使使用使しますぞ。——用意！……自動車屋。」

柄杓とともに、助手を投出すとひとと齊しく、俊明先生のはげあたままは皿のまわるがごとくむきき向むかわつて、漂泊さすらいの男女の上におつかぶぶ押被おさつた。

「別べつびんん。」

「あれ、天……狗……さん。」

「しかり、天狗が承合うけあうた、きつと治るぞ。」

どうちゆうじわ  
道中ハシケチ皺の手巾で、二人の頭も顔も涙も一所くたに拭ふいて

やりつつ、

「する事は乱暴じゃが、ああ、優しいな。」

と、ほろりとして言った。

昭和三（一九二八）年二月



# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、以下の箇所を除いて、大振りにつくっています。

「三ヶの庄を」

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ピストルの使い方

——（前題——楊弓）

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 泉鏡花

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>